

Center for the
Multicultural
Public
Sphere

Working Paper 2022 No.4

語り継ぐ足尾2

—星野茂氏の松木村—

《松木村の位置》



語り継ぐ足尾2

—星野茂氏の松木村—

目次

まえがき

松木村年表

星野家系図

第一部 星野茂氏作成の資料

1. 星野氏宅の収蔵品(写真)

2. 松木村資料室の揭示

ドキュメンタリー松木村

ドキュメンタリー松木村II

松木村が烟毒で廃村になるたった二十五年間の流れの記録

松木を離村し その後の星野家

最後に世間で言われている事実と反している事例を記す

27 24 21 17 15 14 8 7 6 4 1

3. 星野茂氏の記憶

他の文献にない語りべの松木村

本当にあった昔の実話

松木村の養蚕について

なぞの真実は？

松木村から離村し 細尾に転居その後の星野家明治三十五年四月からの史実

「私が松木村に興味を持ったのは」星野家七代目当主 星野 茂エッセイ

「廃村になるまでの原因と関連性」

家族の成長を見守って 話・星野登喜子さん

第二部 公開セミナーの記録

1. 公開セミナーの記録

挨拶と開催趣旨

松木村の歴史と記憶から抜粋

赤上剛氏コメント

加藤清次氏コメント

清水奈名子氏コメント

加藤清次氏からの追加コメント

2. 補足

あとがき

あとがきにそえて

編集後記

まえがき

《足尾にあった松木村》

足尾町を流れる渡良瀬川は、上流の松木川、仁田元川、久藏川が合流した川である。松木村は松木川沿いにあった農村だった。現在は、わずかな墓石が残るのみで、村の面影はない。

明治初期までの松木村は、農作物がよく実り、養蚕も盛んに行われ、生活の程度は比較的豊かであったと、「語り継ぐ足尾―生活勤氏の語りとともに」で、生沼氏が語っている。江戸時代、二宮尊徳は松木村を巡回した際の日記に「田畑共手入十分に行届、家小屋之模様等可也仕上り居候」（田畑とも手入れが行き届き住まいもかなり整っていた）と記したほどであった。

一八七七（明治十）年、古河市兵衛が足尾銅山の前坑主の副田欣一から銅山を買い受けた。一八八一（明治十四）年に新たな鉱脈である「鷹之巢直利」を発見し、その後も銅を多く含む鉱脈の発見が続いた。市兵衛は、外国の最先端技術を足尾銅山に導入して産銅の近代化を図った。その結果、産銅量は急増した。

産銅量が増えるに従い、銅製錬時に排出するガスの量も増加した。ガスは亜硫酸などの有害物質を大気中にまき散らし、山の植物や農作物を広範囲に枯らした。さらには、家畜を死に追いやり、人への健康被害も引き起こしていった。それに追い打ちをかけるように、一八八八（明治二十）年に松木村から大火が発生し、足尾の村々をも焼き尽くした。火に燃やされてもいざれ植物は芽吹くはずであるが、煙害に侵された地に緑が戻ることはなかった。

こうして松木村民の生活は困難を極めていった。一九〇二（明治三十五）年には、ほとんどの村民が古河から示談金を受け取って足尾の別の村や日光、今市、県外へと移り、松木村は廃村となった。

現在、松木村に関する資料は少なく、村の記憶を語ることのできる人はほとんどいない。こうして、次第に松木村のことは忘れ去られようとしている。

現在の松木村は、古河の私有地となっている。植林によって木々が増えてきているものの緑はまだ少なく、人は住んでいない。銅製錬の際に排出される黒い小石―鍍（からみ）―が松木村のあった斜面を覆って

いる。仰ぎ見れば、周囲の山々も岩が露出し、煙害の過激さを実感できる風景が広がっている。

〈星野茂氏の紹介〉

離村した松木村村民の子孫の一人が星野茂氏である。星野家が松木村から日光に移ったのは、星野茂氏の曾祖父の時だった。

星野氏は、一九四八年、祖父長太郎の孫として、父與次郎の長男として日光市で誕生した。首都圏の大学を卒業した後は自宅に戻り、宇都宮市内へ通勤する会社員となった。その傍らゴルフアールとしても活躍した。また、ガイドができるほどの「きのこ博士」でもある。多趣味な上に、興味を持ったことは深く学ぶ性分であるという。

昭和四十年代に、父の與次郎氏ら松木村の子孫らが「松木会」を設立し、茂氏はその手伝いをしていった。しかし、本格的に松木村に興味を持ったのは、会社員を退職後、自らのルーツに興味を持ったことがきっかけだった。その頃から、松木村に関する資料を収集し、丹念に調査し、資料作成に没頭した。親や親戚か

ら聞いた松木村の「昔話」が、記憶の中に残っていることにも気が付いた。こうして松木村の様子が分かってくる。次第に「松木村のことを忘れないでほしい」という想いに変わっていった。現在、体調は万全ではないにもかかわらず、機会がある毎に松木村の歴史を講演したり、自宅への来訪者に資料を紹介したりしている。

自宅は、夏でも涼しい日光の山裾にある。子どもは三人おり、それぞれ家庭を持って独立している。現在は夫婦二人、先祖から受け継いだ地で、孫の成長を楽しみに暮している。

〈本冊子の作成と構成〉

星野茂氏のご協力のもと、松木村の歴史を残すことを目的に本冊子を作成することとなった。筆者が星野氏宅へおうかがいしたり、星野氏から資料を幾度も郵送いただいたりして、原稿を作成した。

本冊子は、二部構成となっている。

第一部は、写真と文章で構成している。写真は、星野氏宅で保管している松木村由来の品々である。写真

はあまり鮮明ではないが、星野氏の説明とともに、松木村の豊かな生活の一端がうかがえるはずである。文章は、星野氏が作成した資料の転載が主となっている。その資料や星野氏宅の「松木村資料室」に揭示している「説明文」の写真も載せた。星野氏が作成した資料の原典は、「足尾鉍毒被害救済会報告書」（星野氏は原本をお持ちであるが、東京大学学術資産等アーカイブズポータルでも公開されている）、星野嘉市「足尾銅山の鉍烟毒の事件」（『金属鉍山研究』第82号）等である。そのほか、子どもの頃に大人から聞いた話や囲炉裏端で聞いた昔話も含まれている。

これらの資料は、星野氏が数年に渡って作成したもので、それぞれ文章形態が異なったり同じ内容を記載したりしている。しかし、そこから星野氏の想いを汲んでもらうため、削除することなく掲載した。また、星野家に関わる女性の一人として、星野氏の妻の登喜子氏の話も掲載した。いずれの文章も、筆者が意味を違わない程度の編集を加えている。

第二部は、二〇二三年一月十二日に宇都宮大学で開催した「宇都宮大学多文化公共圏フォーラム第二十二

回公開セミナー「語り継ぐ足尾Ⅱ」足尾にあった松木村のことを忘れないでほしい」の記録である。この公開セミナーでは、星野氏が語る松木村の歴史と記録を報告し筆者が若干の解説を加えた。その後、三名のコメントーターがコメントを述べた。本冊子には、「松木会」に関する質問への星野氏の回答と、コメントーター三名からのコメントを掲載した。また、赤上氏と加藤氏からは、今後の調査研究に有用な情報を提供いただいたことから、補足として掲載をした。

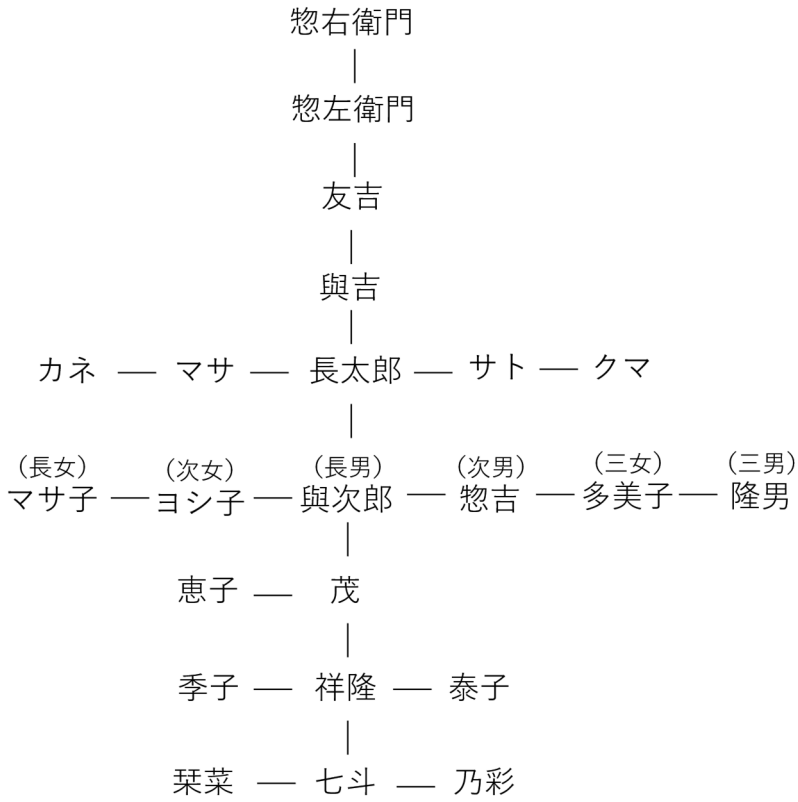
最後に、本冊子は松木村の歴史的事実を記録することを最終的な目的としていない、ということを読者にご了解いただきたい。星野氏も「覚え違い、聞き違いはあるかもしれない」と度々言う。本冊子は、松木村の子孫の声に耳を傾けながら、松木村の廃村という事実を如何に受け止め、現代や未来へ如何に活かすべきか、それを考える素材となることを目指している。そのため、星野氏が作成した資料と記憶を文字にして記録に残す、ということを企図したものである。

松木村年表（星野茂氏作成資料から抜粋）

西曆	和曆	出来事
七九〇	延暦九	勝道上人の弟子の慧雲が方等寺を建てた。
一三一五	正和五	五姓（星野、斎藤、神山、倉沢、亀山）の一族が住み着く。
一五五〇	天文十九	足尾銅山がすでに発見されていた記録有り。
一六一〇	慶長十五	治部、内蔵が黒岩山（備前楯山）に銅発見。
一六一一	慶長十六	足尾銅山が江戸幕府の直山になる。
一八五三	嘉永六	二宮尊徳が足尾村十四村を廻村。松木村三十七戸・一七八人、久藏村十三戸・五十六人、仁田元村五戸・二十人。
一八七七	明治十	古河市兵衛が足尾銅山を買収した。
一八八四	明治十七	酸性雨により山の木が枯れ始める。
一八八五	明治十八	赤倉、高原木、仁田元、久藏、間藤の五ヶ村は龍藏寺住職の渡辺千甚が仲裁人となって、古河から三円〜二〇〇円の補償金が支払われた（第一回目）。祖父、長太郎さんが生まれる。
一八八七	明治二十	四月七日の「お日待」の日の未明、野焼きで大きな火災となり松木村とその周辺、山が燃えてしまった。
一八九一	明治二十四	国会で渡良瀬川の鉋毒問題について田中正造が初質問をする。
一八九二	明治二十五	煙害にもかかわらず松木村には四十戸、二六七人が住んで農耕を続けていた。祖母シナさんが生まれる。
一八九三	明治二十六	ベッセマー式製錬法の導入により煙害が増加する。
一八九五	明治二十八	足尾銅山と松木地権者の示談が成立する。（二戸二十円）

一八九七	明治三十	煙害除去を目的とする脱硫塔が完成する。
一九〇〇	明治三十三	大火災の後、庚申山、皇海山より製錬用の木材を運ぶ林道を松木村に作ることで裁判になった。県議会に「人命救助請願」を提出した。 足尾銅山から提出された「松木村土地使用願」に関し、土地収用法の適用を心配した松木村は、田中正造と会うために代表者二人（嘉市、金次郎）を東京に送った。しかし、面会は出来ず書面のみを渡した。 十月二十二日 免租願、「人命救助請願」を提出することを決定し、選挙で六名を総代に選ぶ。 十月二十四日 栃木県庁に「人命救助請願」を提出したが断られた。総代六名は佐野のいびす屋に宿泊。 十月二十五日 山田友次郎に連れられてみなと屋に行く。田中正造、花井卓造、三好退蔵、塩屋恒太郎 戸口房理に面会し、嘆願書を差し出す。 六名の内三名（嘉市、権平、正三郎）は東京に向かう。鴨田三郎代議士、近衛篤磨貴族院議長に面会し嘆願書を提出する。 十月三十一日 松木村に戻る。
一九〇一	明治三十四	「人命救助請願」を三十戸（全戸）の署名で国会に提出する。
一九〇二	明治三十五	松木村で足尾銅山水樋取払請求訴訟を起こすが敗訴。 松木村住民二十四名が移転することで合意。二十三名が売渡し確定。
一九一四	大正五	松木村廢村。
一九二三	大正十二	久藏村に銅山長屋（四十四棟五軒長屋）が建つ。 久藏長屋を廢止し愛宕下に移る。

1. 星野家家系図(横の関係は兄弟姉妹)



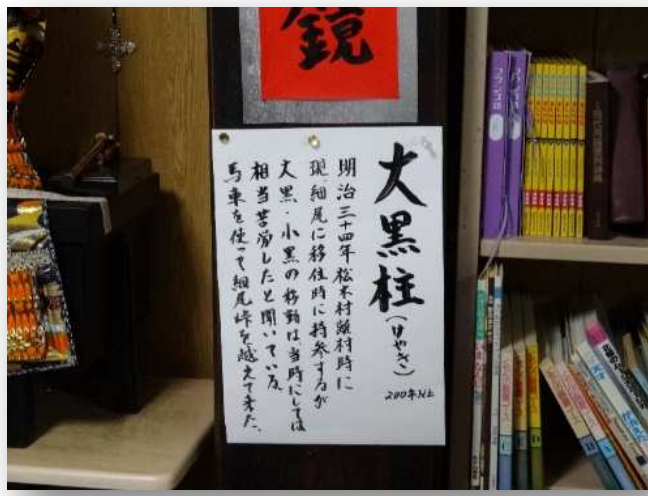
星野茂氏(二〇二二年九月十日撮影)

第一部 星野茂氏作成の資料

1. 星野茂氏宅の收藏品



星野茂氏が作成した資料



大黒柱
大黒柱と小黒柱は松木村から運んできた。現在住む家も支えている。



熊の皮でできた靴
皮が固いため、使用する前日にお湯
で煮て柔らかくしてから履く。
十文字の金具を靴底に付けてかんじ
きにした。



鹿笛
この笛を吹いて鹿をおびき寄せ、
鉄砲で仕留めた。



桐の下駄
煙害で農作物ができなくなると、
下駄を作って日光へ売りに行き、
生計を立てていた。桐の木は煙害
に強かった。



桑切包丁、火鉢の箸など
鉄製品がずらりと並ぶ。



鉄瓶
囲炉裏でお湯を沸かした。



カンテラ
ろうそくを灯して、
使用した。



和ダンス
鉄製の扉がついている。中に鍵
付きの小引き出しがある。この
ダンスには着物や小物を入れて
いた。



生糸を巻く糸巻き
大小複数あり、星野家では養
蚕業が盛んだったことがわか
る。



十手
星野家は日光詣での休息所、泊り
宿でもあった。この十手は富山の
大名から休息の礼として下賜され
た。



石で造られている蔵
現在の地に移ってから建てた。
主に小作人から納められた米を
貯蔵していた。



山一の印（古河の印）が着いた桶
用途は不明。



編み籠
星野氏によれば、桑の葉を入れ
たのではないかとのこと。



蔵の二階
二階には大きな長持や小箆筒があり、沢山の家財道具を入れていた。その多くはすでに処分したそうである。



石の祠（左側）
先祖が祠と地蔵を松木村から運んできた。星野家の守り神として大切にまつられている。

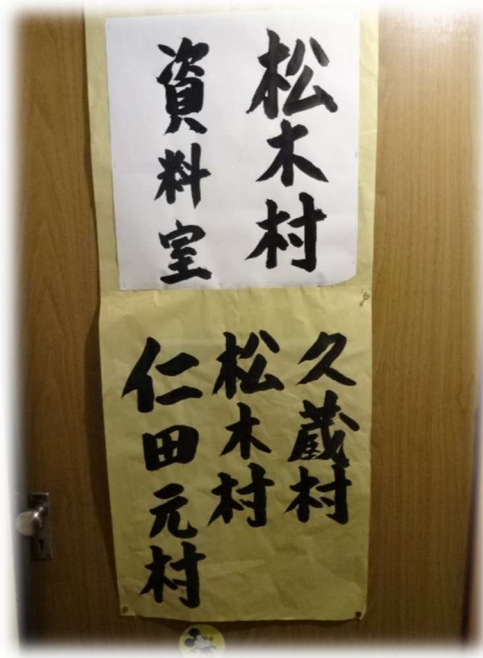


風切り
冬になると玄関前に風切りが古河によって設置される。星野家は古河の地主でもある。この地域は家が損壊するほどの強風が吹くことがある。

2. 松木村資料室の掲示

星野茂氏宅の一室に、「松木村資料室」がある。自宅への訪問者に松木村のことを説明するため、設けたそうである。

資料室内には、松木村で使用していた家財や家具などが置かれている。また、部屋の壁一面には、松木村の歴史、煙書、星野家のことなどを説明した手書きの掲示が貼られている。その内容を記す。



ドキュメンタリー 松木村

松木村は今から千三百年前に古墳を中心として
延暦九年(792年頃)人が住みついたと推定されて
います。資料によると室町前期の南北朝時代
には完全な村となっており、江戸時代には完全な
村となっていました。
江戸時代には古河が栄え、村も大変裕福になり
足尾は元々銅山が発見されたから幕府の直轄地
となり銅の生産量も日本一になっておりました。
しかし明治期に入ると銅の産出量は少なくなり
明治七年頃より古河市兵衛が国より買い受けて
明治十年には新工法を使って再び足尾銅山と
して春巻銅製業が盛んになりました。
ところが銅を製錬する時に出る亜硫酸ガスが
結局のところ最終的に足尾にあって、明治十
年には新工法を使って再び足尾銅山として本格的操
業が始まりました。
ところが、銅を製錬するときに出る亜硫酸ガスによ
って、結局のところ最終的に足尾にあった村が廃村
になってしまいました。その中に最後まで抵抗を続
けた松木村があったのです。

松木村は今から一二〇〇年前の延暦九年(七二〇年頃)方等寺を中心にして人が住みついたと言われてい
ます。資料によると室町時代前の南北朝時代には完全
な村となっており、農工中心に栄えていたと言われてい
ます。

江戸時代には養蚕が盛んになり村も大変裕福になり
ました。現在、世界遺産になった富岡製糸工場の礎
になって貢献した事も事実であります。

足尾は元々銅山が発見されてからは幕府の直轄地と
なり銅の生産量も日本一になっておりました。

しかし、明治期に入る頃は産出量も少なくなり、明
治七年頃より古河市兵衛が国より買い受けて明治十
年には新工法を使って再び足尾銅山として本格的操
業が始まりました。

ところが、銅を製錬するときに出る亜硫酸ガスによ
って、結局のところ最終的に足尾にあった村が廃村
になってしまいました。その中に最後まで抵抗を続
けた松木村があったのです。

明治十年より明治三十五年までの二十五年間でまさしく「松木村ドキュメント」が展開されたのです。古河銅山の製錬による亜硫酸ガスによって足尾村の各村も次第に生活に影響が出るようになり、明治十八年最初に松木村を除く六ヶ村が古河との示談にて三円以上二〇〇円までの損害賠償で決着をしました。この時、松木村は示談に入れませんでした。その後古河銅山の烟毒による影響は増々ひどくなり、明治二十年の史上に残る「足尾大火」によって生活もできなくなりました。この頃から他の文献には記載されていない苦痛の生活が続くのです。当時の生活状況は、別紙に詳しく記書しましたが、私が先人の方々に聞いた話の内容には信じられない事が数々あったのです。

一番印象にのこったのが、「差別」と言う言葉でした。「松木つぼ」と言われて病院などにもかかれませんでした。原因は明治十八年時の示談より外されたのが一番の理由だったかもしれません。

ついに、明治二十八年に古河銅山との損害賠償の交渉に入り、示談が成立し「地価の三倍半と各戸二十円の補償」と決まりましたが示談内容は松木村にとっては全く不利な内容だった！

示談の中の項目に「今後一切交渉示談には応じない」とされて、さらに生活苦になっても交渉はできなくなっていました。

明治三十年、新たな古河の業務拡張により小滝製錬所を本山製錬所に移し、それまでの五倍の烟毒が発生し、ほとんど生活ができなくなってしまいました。村人は出かせぎに出たり、内職に下駄を作ったりして細々と生活をしていました。しかし古河銅山はさらなる無理難題として「林道を作るから通る所を貸してくれ」といつてきたのです。これが「松木村ドキュメント」の最大の元となったのです。これを機に村人は町・県・国に願書を持って連日のように数人のグループで交渉に入ります。

私が感心したのは、必ず誰かリーダーを決めて、全戸で

動く共和主義が見られた事です。

最初は役場へ願い出て県や税務所に願書を持って行ったのですが、ちっとも埒が明かないので、時の衆議院議員の田中正造を訪ねました。しかし一回目は門前払いで会う事もできない状態でした。その時一番頼りになった人が鉱毒救済会の山田友次郎さんだったのです。

明治三十三年から三十四年までの松木村の動きはさまざまいものでした。

現在は細尾の地に住んでおりますが、数々の困難を越えた祖先の方々に感謝して星野家を守っています。

今回の記書は、私の頭の中にある大きな流れを書いただけなので詳細は他の別の記書を見て下さい。

令和二年十月二十四日（土） 早朝 乱筆にて失礼

ドキュメンタリー松木村Ⅱ

知られざる史実

鉱毒でなく烟害による実態

烟毒によって日本初の廃村だが

松木村民の当時の生活はどんなものだったのか。

足尾銅山についての私の見解

（誰も書いていない実状と事実）

星野家七代目当主 星野茂 執筆

いろいろな作家、たくさん作家が足尾銅山の鉱毒事件について書いているが、それは調査史実であって、その時代においての国や県の方針や考え方である。そのような基で古河市兵衛氏が足尾銅山の経営に乗り出したのである。

当時、足尾銅山の経営は明治政府の富国強兵策の一

環でもあったが、その結果、銅の製錬による亜硫酸ガスによつて、足尾にあった村々が明治三十五年の夏までに廃村になってしまった。これを史実として、ほとんどの作家はそれを踏まえて書いている。

しかし、足尾銅山事件のただ俗に言うハード面ではなくソフト面を調べて書いている作家さんがいないことに残念な気がした。

こういったソフト面（内状面）は史実として残っていない。これは、先人の方に聞くとか、先祖が残した日記を読むとか、自分が幼少の頃、囲炉裏端でお年寄りから昔話として当時の生活の有り様を聞いたことである。私も年寄の昔話を聞く事が大好きでお陰で今も記憶している。私が記憶していたことや調べた事は、一〇〇パーセント事実ではなく、故事的なものかもしれない。

松木村は、奈良時代に正道上人の弟子の慧雲という人が方等寺と言うお寺を建てたのが始まりだった。本格的に人々が住み始めたのは南北朝時代からで、

江戸時代には豊かな村として栄えてきた。特に江戸時代は日光の裏街道として、日光参りの上信越方面の大名の泊り宿として、また越後の薬売りの泊り宿として賑わっていた。

現在までもそれらの証しを残した数々の物品等が保管されている。また話によると春と秋には村をあげての演芸会や奉納祭りがあつたと言われている。

足尾十四ヶ村の中でもその村は村人住民も一番多かつた。村の基盤にオカイコの養蚕業が整っていたからである。

その村が「松木村」であり、将来あのような悲惨な廃村になるとは、当時としては、誰も夢にすら見ていなかったと思う。また現在、群馬県の富岡製糸場が世界遺産として脚光を浴びているが、その原動力になつたのも「松木村」の養蚕業の影の力かもしれない。

そんな裕福な村「松木村」が明治十年以後、明治三十五年までのたった二十五年間で、なぜ終つてしま

ったのだろうか。その内状、今回のテーマ「誰も書いていない実状と事実」の内容を記してみたいと思う。

それは朝起きると晴れているのに家の回りは白い霧のようなものが霞んでいたりと、夏だというのに庭先の桑の葉が枯れてパラパラ落ちたりした。その他煙害（亜硫酸）ガスによる日常生活への影響が次の通りである。

※聞いたり調べたりした事

私の祖父長太郎、分家のクマおばさん、親戚の嘉市さん、清さん・・・

○産後の母のお乳が出ない。赤ん坊にヤギのオツパイを飲ませた

○農耕馬が畑の周りの草を食べて、その暁に白い泡をふいて死んでしまった

○村の前の川、松木沢で魚を採って食べたら激痛を

起こした。その後、銅山の病院に村から二時間近くかけて行ったが、「松木ツポ」と言われてなかなか診てもらえなかった。

事の始まりは明治十八年に第一回目の近隣の村五ヶ村と補償示談の場が設けられたが、松木村だけが参加できなかったことだ。それ以来仲間外しの仕打ちを受けた。

○明治二十年四月八日に出火した大火で山も家も動物も死滅してしまい、その冬を越すのに燃料の木々はなし。厳冬の時、暖を取るのに仕方なく表の小屋の羽目板をはがして燃した。

○養蚕業も明治二十五年頃にはできなくなった。桑の木に替わって桐の木が早く育つと言うので桐の材料を使って下駄作りが始まり、中禅寺方面や日光町中の神社等に売り歩いた。その下駄が今の日光下駄の始まりと聞いている。

○村のタンパク源であったカモシカの肉や野ウサ

ギ、熊、日本鹿等が松木の大火で死滅し、村の與吉爺さんをはじめ金次郎さんやその仲間達マタギの仕事もなくなってしまった。遠く群馬の水沼や間藤方面まで買い出しに行ったらしい。

○最も厳しい生活をしていたのが小作人である。松木村は何軒か小作人を使って、田はなくとも畑や山仕事をさせて家賃や地代を取っていた。小作人も早くから離村し、最後の明治三十四年の時点では九軒しか残ってなかった。小作人は最終示談の古河銅山の示談金受取りの権利はなく、地主から移転料等をもらって遠くは北海道や今市大沢地区、日光地区に移転して行った。

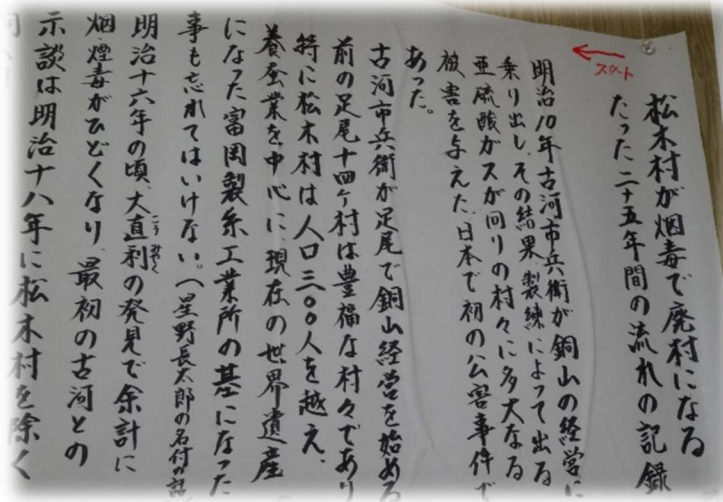
○次に一番大変で苦勞したのが明治三十三年春に起こった「官林道」の問題であった。銅山側は土地を貸せと言うが、松木村民は貸すより全部買ってくれと言ひ、対立して問題が大きくなった。その交渉内容は詳しく別紙に記録してあるが、私はその交渉に行くにあたって、ハード面はどうしてたのだろうと

思った。他の書物には簡単に東京に行つて偉い人会つたとか○旅館に泊つたとか書いてあるが。

私が不思議に思うことは、当時にはガイドマップもなく、交通手段もどうしたのだろうか？宿泊に関してはいくらくらいなのか、空いているのか？各代議士に会う時の手みやげは何するか。服装は何にするか、である。その他にもいろいろあるだろう。

私が感心したことは、交渉人は決して一人でなく複数名で毎回メンバーを変えて上京等をしたことだ。しかし、何だかんだといろいろな所に交渉・話し合ひをしたが、結局は「古河」と言う長い物に短い物である「松木村」は巻かれてしまつて、昔の栄華は取り戻せなくなり、日本初公害による廃村第一号となつてしまつたのだ。

松木村が烟毒で廃村になる
たった二十五年間の流れの記録



明治十年古河市兵衛が銅山の経営に乗り出し、その結果製練によって出る亜硫酸ガスが回りの村々に多大なる被害を与えた、日本で初の公害事件であった。

古河市兵衛が足尾で銅山経営を始める前の足尾十四ヶ村は裕福な村々であった。特に松木村は人口三〇〇人を越え、養蚕業を中心にした現在の世界遺産になった富岡製糸工業所の基になった事も忘れてはいけない。

明治十六年の頃、大直利の発見で余計に烟毒がひどくなった。最初の古河との示談は明治十八年に松木村を除く銅山回りの六村で、損害賠償をもらった。その時の示談の中で松木村は外され、銅山との因縁が始まった。

村人への差別的な圧力、生活にも大きな影響が及んだ。またそれに追い打ちをかける様に、明治二十年四月八日に、史上に残る松木村から出火し回りの村まで焼失させた足尾大火に見舞われた。

これによって山には木々もなくなり、唯一タンパク源となるマタギ達による動物（鹿、熊、小動物）の狩りもできなくなった。その冬には燃やす物もなく、裏小屋の羽目板等を外し、暖に取つたらしい。

明治二十五年の頃には特に煙害はひどい状況になり、作物は皆無、主力の養蚕も桑の木は枯れ、すべて何もかも作る事はできなくなった。男の人は出かせぎに行ったり、ゲタや農具の柄を作つて中禅寺や日光町に行商したりした（ゲタは今の日光下駄の始まり）。

ついに明治二十八年に古河銅山との示談が始まり、松木村としては初めての示談となった。この示談は松木村にとっては大変不平等的な示談で確約書を書かされ、その後の不利な条件となった。

明治三十年には国の命令で煙突の高さが今までの五倍になり、益々煙によって松木村の状態はひどくなる一方であった。

明治三十三年春先に突然銅山は、官林を払い下げられたので、木材を運ぶ道を松木村に通らせるよう土地を貸してくれと言ってきた。その事で銅山との対決が始まり、いろいろな仲裁人が両者の中に入った。その時の「土地収用法」の詳細が分からない為、佐野町の田中正造氏を訪ね、救済と土地関係の話を知りたいと思つたが、留守で会えなかった。

初めての村としての出張では田中正造に会えなかったが、後々に大変お世話になる山田友次郎氏や玉生嘉寿平氏に会え、何かと御指南をいただいた事は大きな収穫であった。

その後、「租税免除願書」を作成し各方面へ嘆願に回つたが、なかなか聞いてはくれなかった。

明治三十三年の後半は松木村の人々にとっては最大の激動の時期であった。村人全員の力を合わせ「人命救助請書」「人命救助嘆願書」を作成しそれを持って、町役場、県庁、税務署、国関係の代議士、弁護

士等に面会を求め嘆願したが、なかなか結果は出なかった。

明治三十四年に入り、正月すぎには田中正造氏に初めて村の代表六名が会うことができ、「人命救助」の請願書を出願した。

明治三十四年七月には古河銅山との示談・補償が、救済会の人達の立合いと弁護士等を混えて話し合いが行なわれた。土地の売却、家屋の補償が事細かく決められて合意に至った。

最後に残った二十五軒はそれぞれ土地・家屋を売却し、明治三十五年には松木を出ることにして、ついに、松木村は全戸離村し廃村になってしまった（星野金次郎宅だけ残る）。遠くは神奈川県の川崎や今市地区・日光地区・細尾地区に別れて現在に至っている。

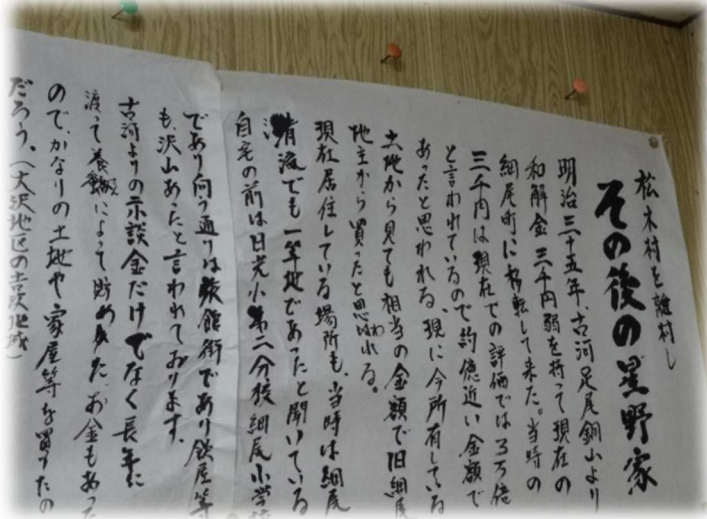
昭和四十八年から松木村保存会が活動してきたが、その時のスタッフも亡くなり、現在、私（星野茂）一人で副会長としてなんとか光を消さないように

日々努めている。

日本初の公害で松木村廃村となってしまったが、決して単なる公害事件で終らせてはいけないと思う。あの時の地獄のような悲惨な苦しみの生活。もしも当時ビデオでも撮っておいたらとても見られない映像だと思う。村人全員で各方面に嘆願や請願をしたという共和的な話し合いと行動は、現代の世の中に通ずる事が沢山あると思う。

令和二年二月二十五日 茂

松木を離村し その後の星野家



松木村を離村し
その後の星野家

明治三十五年、古河足尾銅山より和解金三千円弱を持って現在の細尾町に移転して来た。当時の三十分内は現在での評価では三万円と言われているので約倍近い金額であったと思われる。現に今所有している土地から見ても相当の金額で旧細尾地主から買ったと思われる。

現在居住している場所も、当時は細尾清流でも一筆地であったと聞いている。自宅の前は日光小第二分校細尾小学校であり、向う通りは旅館街であり、飲屋等も沢山あったと言われている。古河よりの示談金だけでなく長年に渡って養蚕によって貯めたお金もお金もあつたので、かなりの土地や家屋等を買ったのだらう。(大沢地区の吉沢地域)

明治三十五年、古河足尾銅山より和解金三千円弱を持って現在の細尾町に移転して来た。当時の三千元は現在での評価では三万円と言われているので、近い金額であったと思われる。現に今所有している土地から見ても相当の金額で旧細尾地主から買ったと思われる。

現在居住している場所も、当時は細尾清流でも一等地であったと聞いている。自宅の前は、日光小学校第二分校細尾小学校であり、向う通りは旅館街であり飲屋等も沢山あったと言われている。

古河からの示談金だけでなく長年に渡って養蚕によって貯めたお金もあつたので、かなりの土地や家屋等を買ったのだらう(大沢地区の吉沢地域)。

しかし長太郎時代、明治三十五年頃から昭和三十年頃までの間は金貸しと小作人の地代・物納で生計を立てていた。昭和三十一年春に長太郎は死去し昭和三十年代から平成初期までは与次郎さんの古河の給与によって生計を立ててきた。

平成の中頃より、土地持ち山持ちの地主も厳しくなり、土地の評価は毎年毎年下落評価され、山林等は全く売れない。山の境等さえ誰も解らなくなってしまう。固定資産税を毎年払わなければならぬし、地主にとっては、現在ではかなり厳しくなってしまう。

現在は茂時代の星野家になってなんとか生活しているが、いくら安くなったと言っても、先祖が残してくれた土地や山林のおかげで細々と暮している。子供達孫達そして親戚、兄妹とみんな安泰に暮しているのは、やはり星野家を代々続けてくれた先祖のおかげである。

現在の星野家は、明治三十五年春に松木村より日光市の細尾町に住居を移し一七年に渡り現在の地で生計を立てている。松木時代は明治八年より古河市兵衛による足尾銅山からの煙害に二十数年に渡り苦しめられた。田も畑も山も川も亜硫酸ガスに犯かさ

れて生活もできなくなり、やむをえず離村のはめにならざるを得なかった。当時星野家は松木村の郷主（名主）であり、代表して古河市兵衛より全村四万余円で補償を得、各戸は地方に移転して松木村は廃村になった。

星野家は細尾村に居住し、現在に至ったのである。初代当主は與吉さんで二代目は長太郎で三代目は與次郎であり、四代目は茂、五代目は祥隆、次いで六代目は七斗になる様に末代に渡って星野家を存続繁栄する事を願いたいと思う。

細尾に移転し、長太郎は二十五才にしてリュウマチによる下半身マヒになってイジヤリになってしまった。外出は人力車で出掛ける様になった。

三代目與次郎について少し述べる事にしよう。

與次郎は旧第二（清滝）小学校を六年間通い、中学校へは行かず、いきなり宇都宮の宇都宮工業高校の土木科へ通った。卒業後は、京都の大林組に就職

し、二年後兵隊に召集されフィリピン方面に行つた。與次郎は一番の成績で昇格して、二十歳時には少尉軍人になって小隊長となり、五十名の部下の指揮官になった。終戦後は大林組には戻らずに地元古河電工に職工として就職した。その後、十数年経つてから宇工を卒業したのが解り、古河アルミ工場の課長クラスになった。

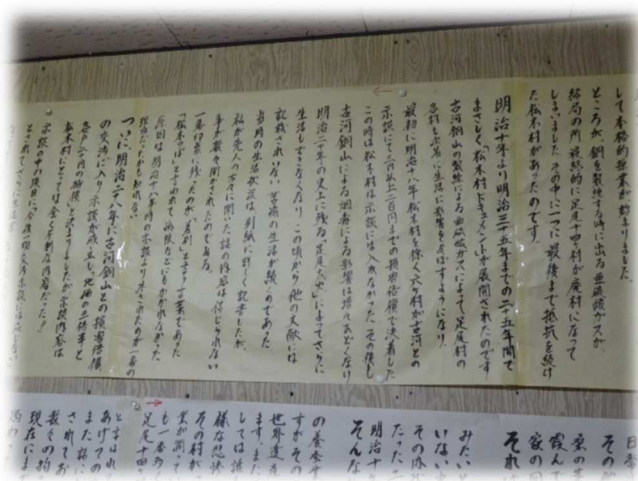
五十五歳で定年になったが、地元細尾町で人望も厚く自治会長、消防分団長、納税組合長、宇工会々長、七里地区土地改良委員長等、数々の要職を歴任した。六十三歳で脑梗塞になり七十四歳で死去してしまつた。

戦後星野家は細尾地内に三軒の分家を出した。與次郎の姉の星野衣料店、中細尾に星野惣吉宅(弟)そして、三軒は下細尾に下家星野保宅(與次郎の継子)がある。彼岸、お盆には線香上げを行い、親戚付き合いをし、交流している。

衣料店 星野寿司

中細尾 星野裕一
下家 星野 保

平成三十一年二月二十八日 書き終了



最後に世間で言われている事実と
反している事例を記す

(田中正造は松木村に来た)

答 一度も来ていない。明治三十二年に小滝村に来ている

(松木村は鉍毒によって廃村にされた)

答 松木村は鉍業毒でなく実煙害(烟毒)

(足尾大火は?)

答 実は(新田利三郎による)放火だった?

その証拠は。

① 古河市兵衛の側近だった新田利三郎が連日の示談交渉の疲れで半分ノイローゼになっていた。早く交渉受け役を終らせたかった。

② 明治二十年四月七日の夜は非常に風が強く、翌日の四月八日の「お日待の日」には火入れをしないと名主(郷長)友吉さんは若い衆に言ったらし

い。

もし「お日待の日」をやるのなら朝八時以後に火入れするようにと若い衆に言ったとか。しかし、火の手が上がったのは八日の未明、朝早く陽が出る前に出火した。

③ 当時、悪評の高い龍蔵寺住職の渡辺先甚は、何せ昔から松木村の豊かさを妬んでいた。古河市兵衛にべつたりの人で明治十八年の五ヶ村示談会にも松木村を入れなかった事は有名である。

その他にもいろいろな故事伝説が沢山ありますが、探求する度に興味が湧きます。

銅福畑の話、殿様が刀を置いて行った話、長太郎名付けの由来、まだまだ沢山のお話があります。

次回執筆する時はもっとロマンのある「ドキュメンタリー松木村」を書きたいと思います。

令和三年三月二十八日 星野茂

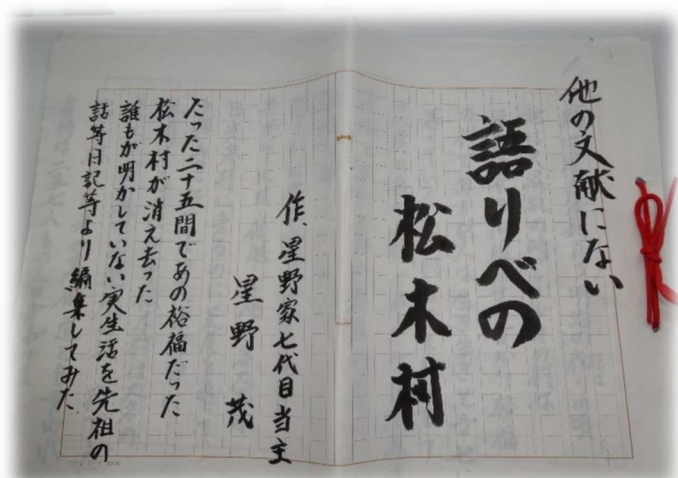
3. 星野茂氏の記憶

星野茂氏は、子どもの頃から、祖父母や両親、親戚から松木村の記憶を語り聞いていた。その記憶を思い出し書き留めるようになったのは、大人になってからである。自ら集めた歴史資料とともに、松木村の様子を再構成し、文章にしていた。やがて、星野氏の想いは「松木村のことを忘れてないでほしい」に変わっていった。



他の文献にない
語りべの松木村

作 星野家七代目当主 星野茂



たった二十五年間であの裕福だった松木村が消え去った。誰もが明かしていない実生活を先祖の話や日記等により編集してみた。

時は江戸末期から明治の始まりの頃、世は大混乱の時。しかしその村はそんな事は何知らず、昔から裕福な村で毎日村人は生き生きと幸せに暮らしていました。その村は松木村と言います。足尾の奥の山村であったが、生活源は養蚕と、米作以外の農産物を中心に、裕福な暮らしを続けていました。

松木村は奥の山村とは言いながらも、昔から北陸、信越、上越の各大名が日光参詣のために足尾を通り中禅寺に抜けて、日光東照宮に参拝したため、その途中であった松木村は大名の宿でした。また富山越中の薬屋の泊り宿でした。松木村は日光の裏街道とも言われ、当時は二五七人もの人口がいました。

その村が三十年後に廃村になり、村人の悲惨な生活が始まるとは誰も知るよしはなかったと思います。

事の始まりは、世の中が江戸幕府から明治政府に変わり、国の殖産として古河市兵衛が足尾銅山を国から買い取って新技方式で銅の生産をしたことにより、今までの何倍もの増産で、銅の製錬による亜硫酸ガスによって徐々に人々の生活が蝕まれました。そういった結果になってしまったことは、古河市兵衛が悪いとか、国が悪いとかの問題でなく、村としての運命だったのかもしれないと思います。

足尾銅山は昔から江戸幕府の直轄の銅山で日本一の産出量があり、東照宮の屋根や上野の増上寺の屋根等に使われていました。しかし、江戸時代末期の頃から銅の産出も少なくなり、幕府も重きを置かなくなっていました。

明治十年に古河市兵衛が買い取った後、明治十六年には大鉱脈がみつかり、増産増産で益々各村には煙毒が流れ込み、農産物は採れませんでした。

人体にもいろいろな障害が起こり始めました。古河

と交渉するも、なかなか補償もされません。

星野金平さんがNHKのテレビ放映「ドキュメントリー松木村」で話しました。

「結局は短い物は長い物にまかれてしまう。当時の切実な思いがわかります。古河市兵衛が銅山経営に乗り出してから七、八年たったところに、

朝起きて雨戸を開けて庭に出てみると、雲一つない空なのに何か太陽がかすんで見えるな。何か霧に覆われている感じだな。あれ？夏だというのに大分くわの葉っぱが落ちてるのはおかしいな。そうしたら近所の奥さんが来て、ゆうべ○○の家の馬が死んだってさ。原因は道端の雑草を食べたのがそうらしいよ。その他にも子どもが前の川の松木沢で魚を採って食べたたら下痢して病院に行ったらしい。

○○さん宅の母さんも母乳が出なくてヤギの乳を飲ませているみたい。」その他にもいろいろな病状が見られ、作物だけでなく村人の身体にも亜硫酸ガスの影響が出てきました。

明治十八年にやっと古河との初の示談・補償交渉に
なりましたが、なんと松木村だけが外され他の五ヶ
村（久蔵、仁田元、高原木、間藤、赤倉）だけ補
償・示談となりました。

なぜ松木村が外されたのかは、別の文にも書きまし
たが、元々松木村は龍蔵寺の住職の渡辺先甚氏と不
仲であり、その渡辺氏が仲裁人となったのがその示
談会に入らなかった理由らしいです。渡辺氏は昔よ
り松木村の裕福さを羨ましがって銅山、古河氏にべ
々着きのようだったらしいです。

松木村はその後も益々煙害がひどくなり、古河の病
院に二時間もかかって歩いて行って診てもらおうと
しても、その頃から「松木っぽ」と言われてなかな
か診てくれない、差別的なことをされたのです。当
時は病院も古河銅山の病院しかなく、そこに頼るし
かなかったのです。今の世では考えられない事が当
時はあったのです。

格言に「泣き面にハチ」と言う言葉がありますが、

正しく松木村もそうであったのです。

明治二十年四月十七日、史上に残る「足尾大火」が
松木村から出火したのです。火は足尾の東地区を全
焼させ、亜硫酸ガスで山の木々も枯死している為に
一気に何もかも、家も小屋もほほ燃えてしまいまし
た。

唯一、村ではタンパク源となる鹿、熊等の動物もい
なくなり、マタギを仕事にしていた男達も狩りには
出られません。肉も魚も食べられなくなり、男達は
出稼ぎに出るようになりました。

村では桐の木が早く伸びると言う事で桐の木を植え
て、下駄作りと農具の柄を作って、遠く中禅寺を通
って日光の町まで売りに歩きました。

冬になると山に行っても燃し木もなく仕方なく裏の
小屋の羽目板をはがして燃やして暖を取ったとも聞
いています。

明治二十五年の頃は、益々煙害がひどくなり早くか

ら離村する家も出てきました。細尾には今は家がな
いが「マンジ屋」と言って大工の家がありました
が、その主人は星野長作と言って、早々に移転し
て来た人です。

明治二十八年八月七日に町長の三上成所と有志の鶴
島利三郎氏の仲介により、初めて銅山側と示談が始
まりました。内容は地価の三倍半の補償と一戸当た
り二十円の割当金で一応は和解となった訳ですが、
全くの不平等的示談で古河銅山有利の和解だったら
しいです。文中には、「今後一切交渉等は無し」とも
書かれています。

明治三十年「鉍毒予防工事命令」が発せられ国が煙
突の高さを五倍にしたため、製錬所より二里の範囲
までが煙害でこれまでもないほど全く住めないよ
うになってしまいました。

村では群馬（上野）から行商人等が来て衣料品や
魚、肉を買ったと聞いています。松木村も明治二十
三年頃まで養蚕業で現金収入があり、多少の預金は

持っていたので生活をしのげました。

子どもたちの話をしましょう。

当時、我が星野家は松木村上部落の名主であり、昔
殿様が泊まって、刀や十手などを置いていきまし
た。我が祖父の長太郎は、刀のツバをひもに通して
道をジャラジャラ引っぱって歩いたとか、「手裏剣」
で学校で工作したり投げたりして遊んだとか。

私のひいじいさんの與吉さんは元々マタギであり、
鉄砲の名人と言われた人であって、足尾でも有名な
人だったらしいです。弟子にやはりマタギの星野金
次郎さんがいて、よく二人で鉄砲ぶちに行ったと
か。鉄砲も村田銃と言って一部戊辰戦争でも使われ
たものでした。

動きが大きく変わったのは明治三十三年。松木村が
廃村になる二年前の話で、古河が松木村に国から払
い下げた山林の木材を運ぶために「官林道」を貸せ
と言ってきたのが始まりです。

このあたりから村人の本当に共和主義的一致団結の行動が始まったのです。

官林道の問題で古河は一部貸せと言うが、松木村としては全部買ってほしいとお互いに対立してしまいました。そこで、それならば、佐野に居る田中正造代議士が詳しいから代表を選んで田中代議士に会いに行く事になりました。代表は、星野嘉市さんと星野金次郎さんに決まったが、めったに遠出をしたことがない為に、今の世の中の様に簡単には行けませんでした。

旅支度は？先生におみやげは？旅費は？食事代は？宿泊代は？という問題もあったでしょう。

村人が費用金を出し合って、明治三十三年九月十三日に二人は松木を出発しました。当時の金額で十五円の費用で鹿沼に一泊、次に栃木・足利・太田に一泊しました。

九月十七日に佐野に着き、正造宅に行ったが不在という事で会う事ができませんでした。正造は東京に

行ったと言うので、佐野のエビス屋に泊まりました。次の日、東京に向かいましたが田中氏には会えず、収穫があったのは鉾毒救済会の理事の山田友次郎という人に会えた事でした。この人は松木村が廃村になるまで松木の人たちに大きな役割をした人で、最後の和解まで面倒を見てくれた人物でした。二人が松木に戻った後、村では田中正造の評判は悪くなり「正造は松木にとって役立たず。去年は小滝村に来たのに松木村には寄らずに帰ってしまった」と松木村民には悪評でした。

第二弾の交渉として総代六名を選んで「人命救済請願」「租税免除願書」を持って再度上京し、初めて田中正造や他の代議士に会って請願しましたが、認められませんでした。

明治三十四年に入り、いよいよ激動の日々が続く事になりました。

詳細は星野嘉市が書いた「銅山の鉾毒事件」³に記さ

れています。村人が最後の交渉や補償問題で、最後に残った二十四軒は毎日毎日交渉に明け暮れました。当家も、小作人を抱えていましたが、支度金を出して早々に村を出て行ってもらいました。小作人の家等は旧松木村の住居図に記載されています。いよいよ最終示談となり救済会等の仲裁により村全体で四万円で決着しました。

明治三十五年には春を待たず、遠くは川崎市、大半が今市方面、残りは清滝や細尾に早々と移転し始めました。

引越しと言っても現在ののような簡単な引越センター的なものはなく、神子内村を通過して狭い細尾峠を通過して馬の荷台で何回も運んだ、と言っておりました。特に今、稲荷様の横にある石の山の神等や現在も自宅で使われている大黒柱や小黒柱等は手間がかかったと言われています。

明治三十四年の示談交渉の時に一時、松木村全戸、大沢村の田村開墾地に移転するように古河市兵衛よ

り提案がありました。その広さ八十町歩（二十六万四千坪）が古河市兵衛の持ち土地だったのです。

我が星野家はそのうちの二町歩（六千六百坪）を買い小作人に田を作らせ、上納米を家の裏の蔵まで運ばせていました。

其の大沢村（今の森友インター付近）の田んぼも戦後の片山内閣時に、坪六十銭で払い下げてしまいました。（不在地主制度により強制的に）

我が家も松木より細尾に移転した頃は、相当の金持ちだったと思われれます。実際に長太郎さんは体が不自由なのに金貸しとマジナイ師で生計を立てていました。

現在の細尾の居住地は一等地でした。今市の栗野銀行に七百万の預金があったのが、銀行が倒産してしまい七百万がパーになりました。

細尾に来た時、ヤマカ（神山家）中心に山、畑、宅地を買い占めました。現在では何億の金額に相当します。子供達には分家を与えて現在三分家は残って

います。日発（日光発電）より先に居住していたので、一部日発の地主となって今も続いています。

細尾の共有林組合に入るのに七十円払いました。但し、共有林組合の役員にはなれず細尾に来た当時はいくら七十円を出し組合に入っても、「松木っぽ」と言われ組合役にはなれませんでした。

やっとなつと與次郎時代になって自治会やら消防団に入り長となる事もできる様になりました。細尾に来てから今年で一八年経ちますが、まだまだ細尾の旧家の年寄りには「よそ者」と言う感じもします。

その後の星野家は別紙巻物に記載してありますが、今も我々にとつては先祖が残してくれた星野家の伝統と繁栄を守って行きたいと思えます。

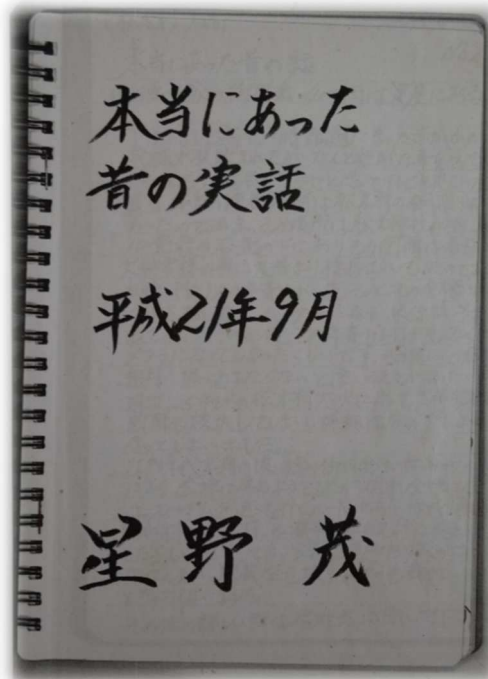
今になって先祖にあの苦しかった時代をよくぞ乗り越えた、と感謝しています。

星野家第七代 茂書

令和二年十一月十二日（木）



土砂で埋まる川・三川合流付近
（二〇一九年十二月十三日撮影）



本当にあった昔の実話
平成二十一年九月 星野茂

No 1 ◎徳川家のご用金四十万両は足尾にある。

TBSテレビ等で一時話題になった赤城山の発掘が放映されたが、またテレビ局のヤラセと思ってテレビを見ていました。実は本当の埋蔵場所は銅福畑にあったのです。その場所は松木神社の横に有り十畳敷の石畳のしたにあり、その図面は当家の大神宮様の奥に大昔より保存されていたのです。

当時、村の一人の年寄りが夜、そつとその銅福畑の一部を掘ったら、ハニワや水晶玉、天保銭等が出てきました。その後、その年寄りは目が見えなくなってしまうらしいです。その後、その畑を絶対に掘ってはならないと言い伝えがあり、明治二十五年頃の松木村大火によって大神宮様の図面も焼失してしまい、詳細は分からずじまいになってしまいました。

江戸時代末期の頃の薩長の進軍により、徳川御用金を会津に集めようとなりました。会津に行く道は皇海山を通って行くルートがあり、途中の赤城山より隠

れ村の松木村、久藏村、仁田元村に隠そうとしたらしいです。でも今は、足尾砂防ダムの下になってしまい、埋藏金を掘り出すのも難しい状態となつてしまいました。

No 2 ◎公害の父 田中正造がにくまれていた

明治三十年前後より足尾銅山の銅の製錬による亜硫酸ガス発生によって、銅山製錬所の北側にある大昔からの三村、松木村、久藏村、仁田元村が煙害によって生活が出来ない事態になってしまいました。夏だと言うのに桑の葉がパラパラと落ちたり、乳母の乳が出なくなったり、一部奇形児的赤ん坊が生まれたりしました。日増しに三村の人々は村を離れ、久藏村、仁田元村は廃村までになってしまいました。その現況を見た村の人は五人く十人のグループを作つて現在の佐野市まで歩いて二泊く三泊かかつて、時の衆議院議員田中正造氏を頼つて嘆願書を届けましたが、最初は門前払い。二度目、三度目と全く聞

き入れてもらえなかった。村人は日増しに亜硫酸ガスによる苦しみの日々に追われ、全く受入れてくれなかった田中正造を憎みました。田中正造は時の明治天皇の側近であり、当時、村人は田中正造しか頼る人はいなかったのです。

この公害が日本初の煙害の公害なのです。明治三十五年頃になって田中正造がやっと耳を傾けるようになったのは、渡良瀬川を流れて地元の谷中村で異変が起こり米が出来なかったり魚が死んだりしたからです。やっと足尾銅山に何かあると思ひ、真相を探ることになり、古河市兵衛と交渉が始まりました。

No 3 ◎足尾、松木村に殿様が泊まつて、刀をおい

ていった。分家（星野保さん宅）の祖伯母（クマさん）の話

松木村がまだ鉞毒の襲われていなかった頃、松木村が豊かで平和な時代く江戸時代の参勤交代があった頃の話

昔、松木村は東照宮参拝の為、上越・群馬方面より大名たちが足尾を通って日光に行きました。ある大名（新潟方面）は、松木村の我が祖先の名主時代の星野家に宿泊する事に決まっています。自宅は高台の中腹にありましたが、下の大通りより五十メートル位上方にありました。見晴らしの良い所でした。

ある日、家人が家の下方を見ると殿様の行列が見えたので「すぐにお湯を沸かせ」と言うと、殿様が家に着くまでに湧いてしまいました。たった五十メートルの下方で見えたのに、何故そんなに早くお湯が沸いたのか。今思えば、家に昇る道はいろは坂のようなスネークロードだったので。

殿様が家について囲炉裏を囲んで夕食をしている時、昔のおばちゃんを着ていた物を見て、「それは何と言う着物なんだ」と言われたのでおばちゃんは、「綿入れチャンチャンコです」と答えて渡したそうです。

次の日に出発する時にお礼と言って刀二振を置いていきました。次に来た時も（剣とか十手、アイクチ）等を置いていきました（ちなみに銃刀法持参認定されています）。

No 4 星野家の生業は狩猟と金貸しであった

「星野家家憲」によると星野家の祖先は藤原鎌足公の流れで伊豆守が祖先であると記されている。

松木村に住み着いたのは、星野家は平家の出の為に源氏に追われ、山奥の松木沢上流に身を潜めたからであろう（湯西川村落も同じ）。おそらく十二世紀前半の頃である（一二〇〇年弘安九年に細尾裂岩神社が出来た頃）。

足尾の松木村は、久藏村、仁田元村の間に挟まれた裕福な村で、約五十軒位あったそうだ。主な産業は養蚕業で桑の木が多くあった。米作は無く、麦、ソバ、豆等を作っていた。年一回は山焼きをして畑にしていた。明治二十年の足尾松木村の大火は、星野

家の先祖が名主だった頃、村の若者に「今日は風が強いから山焼きは止めろ」と言ったにもかかわらず山に火を入れたのが原因らしい。先祖の與吉じいさんは鉄砲の名人でカモシカや熊を狩り生活の足しにしていた。今でも熊の肝や毛皮靴、鹿の角の道具等が残っている。

長太郎じいさんは十八歳の時にリュウマチにかかり全身が動けなくなってしまつてイジャリ姿になつてしまつた。仕事は細尾に移転してからは小錢貸しの仕事の主になつた。今でも回収できない証文が数多く残されている。

No 5 長太郎じいさんが月の輪熊と戦つた事

明治三十五〜三十八年頃、前山の釜形の山に長太郎じいさんは父親の與吉じいさんとカヤ（芝の長いもの）を刈りに行きました。二人で歩いていくと道が二つに分かれていましたので與吉さんは右の道、長太郎さんは左の道に分かれて行き、頂上で落合う事

になりました。長太郎さんが五〜六分歩いて行くと突然、子連れ熊と出会つてしまいました。

長太郎さんはびっくりして、即時横側にあつた大きな石に飛び乗りました。すると、大きな親熊が長太郎さんめがけて立ち上がりました。

長太郎さんは、脇差にしていた山刀で月の輪熊のノドの白い部分に差し込みました。一旦母親熊は後ろに倒れましたが、再び立ち上がつてまた襲つてきました。今度は熊のヒタイ（眉間）を山刀でたたき切りました。長太郎さんより大きい月の輪熊の母親は、後ずさりしながら、下の沢の方に逃げていきました。長太郎さんは三度目に切ろうとした時に自分のヒザを切つてしまい、血だらけになつてしまいました。それでも、そこにいた子熊を捕まえて袋に入れて與吉さんを大声で呼びました。與吉さんが来てびっくりして山を下りて、家に帰つてきました。

松木村の養蚕について

いつの時代においても、衣類は無くしてはならないモノです。現代では化学繊維が主流を占めて、アクリル、ポリエステル、ナイロン、レーヨン等の繊維素材が大半を占めています。

中世の時代より着る物は天然物しか無く、とくに絹織物は貴重な物だったため国内外で、高値で取り引きされていました。その素材の絹は、養蚕業によるお蚕、絹糸、絹織物となるのです。大昔から北関東圏では良質の繭が生産されることは知られていました。あの徳川家康が関東に幕府を開く要因の一つとも言われていました。

本題に入ります。北関東でも特に松木村は養蚕業が盛んで良質な繭が取れ、松木村最盛期には年三〇〇〇円以上（現在の金額にすると村全体で九億円以上か）の生産量を誇っていました。その当時、群馬県

の水沼町に買取りの元締め星野さんという人がいました。仲買人はそれを、今や世界遺産になっている富岡製糸場に卸していたらしいです（今でも水沼町に星野家博物館がある）。

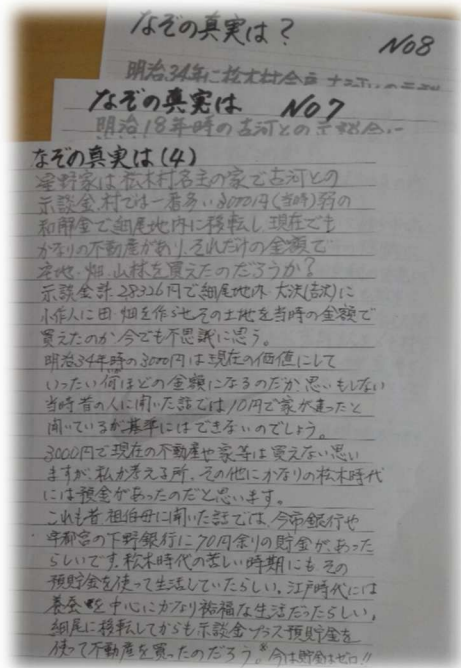
明治の最初の頃は、養蚕業は国の殖産事業の一環であり、養蚕業推進に関わった人物として渋沢栄一の名も挙げられています。

現に私の家に松木村時代に使った養蚕業の道具、用具が一部保管してあります。繭の品質の良さは桑の木の子の良さであり、松木村ではとくに品質が良かったらしいです。

※私が幼少時、母の実家でお蚕が桑の葉を食べると、夜眠れないほどの音がします。いい葉ほどよく食べるらしいです。

令和四年三月十日 茂の昔話し

なぞの真実は？



① 星野家は松木村の名主の家で古河との示談金を村では一番多い三千円弱（当時）の和解金をもらい、細尾地内に移転した。現在でもかなりの不動産があるが、それだけの金額で宅地、畑、山林を買い取ったのだろうか？

示談金合計二八、三二六円で細尾地内、大沢（吉沢）に小作人に田畑を作らせるよう土地を購入した。その土地を当時の金額でなぜ買ったのか、今でも不思議に思う。

明治三十四年当時の三千円は現在の価値にしたいい如何ほどの金額になるのか分からない。当時、昔の人に聞いた話では、十円で家が建ったと聞いているが基準にはできないだろう。

三千円で現在の不動産や家等は買えないと思うが、私が考えるところ、その他にかなりの松木時代の預金があったのだと思う。

これも昔、祖母母に聞いた話では、今市銀行や宇都宮の下野銀行に七十円余りの預金があったらし

い。松木時代の苦しい時期にもその預貯金を使って生活していたらしい。江戸時代には養蚕を中心になり裕福な生活だったらしい。細尾に移転してからも示談金プラス預貯金を使って不動産を買ったのだろう。(今は貯金ゼロ！)

② 明治十八年時の古河との示談会になぜ松木村だけ外されたのか？

松木村の悲劇に大きく影響していたと考えられるのが、龍藏寺の住職である。

第五十四代住職に渡辺宣順(先甚)という旧今市市にある老舗旅館「つたや」の子孫がなっていたという記録がある(後の太田貞観の史書より)。太田貞観は宣順が千葉の寺に行った後も松木に足を運び村人を助けた。松木村にとって大切な人だった。初めての古河と公害訴訟を六ヶ村で起こすが、この時仲裁人として駆りだされたのが宣順であった。この集団訴訟から外されていた。これがもとで松木村は悲

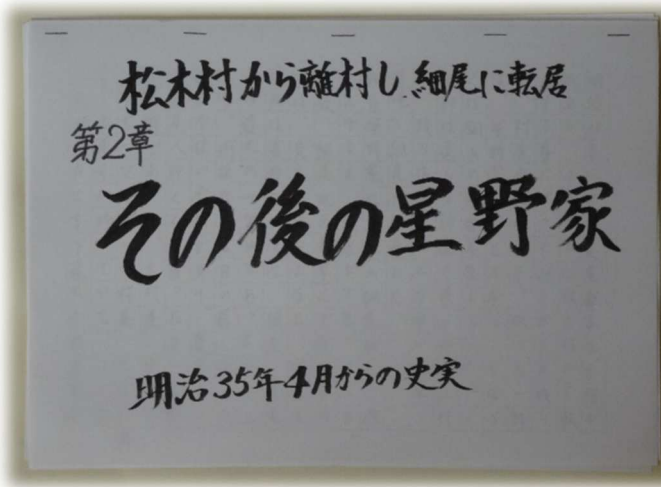
惨な運命を辿る。

宣順は、集団訴訟の場に松木村の住民を初めから呼ぶつもりはなかった。

③ 明治三十四年に松木村全戸二十四戸は、古河との示談を計四万円で和解したが、実は村全体では当時三十三戸あった。残りの九戸はどうしたのか？

当時松木村では、本家、分家、本家より別居した家、そして大家の家では小作人がいた。村全体では馬(農耕馬が八頭いた)を共有して、山からの木材(薪)を運んだり、畑を耕したりと共同で農作業等をしていた。松木神社のお祭りでも馬をかり出して、村人達は楽しく暮らしていたとか。

古河との示談は全戸の中でも本家的な名義を持った家が対象となり、分家や別居宅、小作人宅には補償されず、本家の方から移転金を支払った。星野與吉家の示談金が多いのは、小作人を使っていたからだった。



松木村から離村し細尾に転居
その後の星野家
明治三十五年四月からの史実

明治三十五年に古河足尾銅山と示談が成立し、四月までに松木村から転出することに決まって、一戸を残して二十四戸が村を出て行った。残った一軒は、星野金次郎さん宅で、しばらくは銅山の水番等をしていた。

二十四戸は、遠くは神奈川県の川崎に行き、残りほとんど今市、七里、清滝、細尾に転居した。我が家星野家は現在の細尾地区に住まいを構え、現在まで至っている。何故細尾地区を選んで住んだのかは、先人の話によると、現在の場所は当時としては最大の一等地であったからという。何故ならば目の前には、日光小学校の分校があり、表通りには足尾へ行く人が宿泊し、遊興歓楽街であった。木村屋、ササヤ、イタヤ、マツヤ、中村屋、大木戸屋と今でも屋号が残っている。その他にもヤマカという最大の財産家があったり、清水屋、丁田屋、酒屋等多くの店があったりした。細尾分校には清滝からも通学

していたという。

我が家も、村の中で一番高額の示談金をもらい、養蚕業でもうけた金を持って来たから、山や畑や宅地を相当数買うことができた。家財道具も松木村から荷車や飼っていた馬で馬車を使い、細尾峠を越えて何度も運んだと聞く。細尾と松木を往復するには、丸一日かかったという。現在の家に使われている建材も松木から運んできたものである。大黒柱、小黒柱、六寸柱が十六本使われている。家財道具も今は使っていないが、タンスや手箱、養蚕で使った各種道具等、今では骨董品的になっている物が、今でも残っている。

細尾に転居してからは、近くの財産家のヤマカから食器や皿のほか、土地等もかなりの場所を買った。現在の荻原商店の回り、星野衣料店分家回り、星野裕一分家回り、星野保下の家の回り等、相当の土地を買ったと思われる。

その他、細尾共有林組合に入るのに、七十円とい

う大金を出して入会したらしい。それも最初は、松木から来た者に対しては偏見的な見方をし「松木っぼ」と言われて差別的な行いをされていた。

松木から細尾に来た時分は、相当の金があったらしい。細尾地区に山や畑や家財道具もあった。私もびっくりしたのが、今の大沢地区（吉沢）に三町歩の田を持ち、小作人を使って米を作っていた。その半分を年貢米的に細尾まで運ばせ、裏の蔵に積んだ。戦後、私が五、六歳の時に見た覚えがある。

私が小さい頃覚えたことが、今思い出される。それは、家が昔の建屋だった頃、囲炉裏端でよく分家のクマおばさんが語ってくれた松木村の話や、長太郎じいさんが熊と戦って子熊を取ってきたこと等だ。その頃はテレビもないし、部屋は寒いし、囲炉裏端にいないてはならず、自然と大人の話を聞くようになつた。また我が家は富山の薬屋さんの泊り宿でもあり、全国津々浦々の話を聞かされた。とくに家にある熊の「えん」はものすごく貴重な物だと言

っていた。今でも大切に保管している。

大正時代に入り、我が父與次郎が生まれる頃には、祖父長太郎は難病の全身リウマチになり、全く歩けなくなり「イジャリ」状態になってしまった。それにも増して、松木から持って来た金もいろいろと買ってしまった、残った金七十五円（現在では一千万以上）の預金を今市の栗野銀行に預けていたが、銀行が倒産して全くゼロになってしまった。

それからの生活の元手は、長太郎の占術のような仕事や、地代だった。地代はけっこうあり、玄田畑の約二十軒（新細尾社宅の住民）に畑、今の萩原商店から見目商店にかけての商業地、清滝三丁目の長屋や今の手塚シンさんの長屋の賃料があつて生活をしていた。中には、地代・家賃が払えず、山の刈払い等の手間賃で払った人もいた。

またこの時代に、我が家を本家とする分家を出した。第一分家は、長太郎の妹（クマ）さんと福三さんで、いっしょに下の家に住まわせた。第二分家は

長太郎の次女（ヨシ）さんを牢場の地に住まわせた。第三分家として中細尾に與次郎の弟の惣吉を住まわせた。この時代は、自分の子どもたちを遠くに出さずに近くにおきたいという親心から、分家を作つて子どもたちを住まわせたのだろう。

長太郎さんは細尾に来たのは十七歳の若者で元氣な青年だったと聞いていたが、二十五年頃ちょうど熊と闘つて自分の足を切つてしまった頃から、全身リウマチの難病に襲われて歩くこともできなくなつた。私が幼少の頃はかなり厳しい祖父で、おっかなかつた気がする。スポーツが好きで、家族マラソン、相撲大会、もちつき大会等はリーダーとなつてやっていた。そんな長太郎も昭和三十年の春に亡くなつてしまった。

その後は、私の父の與次郎が家督を取り、いろいろな要職を遂行していた。古河の会社、細尾自治会、消防、市の土地改良委員長などになって、素晴らしい功績を残して七十四歳で亡くなった。

今は私自身の時代になったが、昔のような栄華はなくなってしまった。それでも、何とか星野家を守って毎日先人たちに感謝して暮らしている。私も病気で仕事を辞めてから、時間もできたので、松木村問題や細尾にきてからの話、昔年寄りから聞かされた話を思い出している。また古い古文書等を調べたりして、自分なりに書き物もした。そうしている内に、だんだんと面白くなって、タブレットに書き込んだりもした。

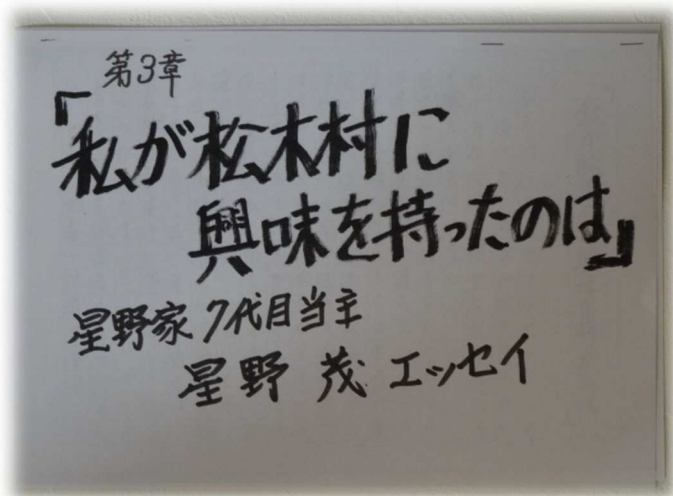
松木村フォーラムに参加して講演をしたり、各関係者より取材を受けたり、娘と話したりして、歴史は深く魅力あるものだと感じた。文中は、乱筆乱文でまとまっていないが、私の意中を感じ取ってほしい。

半分は後世に松木村のことを残し伝えたいと思いい、半分は自分の趣味でもある。これからも星野家が末代まで続くように、子どもたち、孫たちにお願ひする。星野家はみんなが守っていくことが一番大

切なことである。



松木村跡に残る墓碑
(二〇一九年十二月十三日撮影)



「私が松木村に興味を持ったのは」
星野家七代目当主 星野 茂 エッセイ

松木村に、人が住んでから千年以上たつが、松木村問題が世に出た明治初期からしか世間の注目をあびていない。

明治十年頃から明治三十五年までのたった二十五年間で松木村は消えてしまった。廃村になるまでの本当の事実はどうであったのかに興味を持った。松木村に関しての文献や書物は沢山の作家やルポライターにより出版されているが、どれもこれも、足尾銅山に関する内容、間違った文章が多いと感じた。私としては、松木村が消えた本当の理由を調べてみたくなった。

ある書物では「松木村鉍毒事件」とあるのに銅山中心の話しか書いていなかった。そもそも松木鉍毒なんて一つもない。それは、烟毒、煙毒であり、鉍毒という言葉は、谷中村で使う言葉だ。松木村は、烟毒によって廃村に追い込まれた村なのである。その他にも間違った記述が沢山あることに気が付いたので、自分なりに調べてみたくなり、七十歳を過ぎ

てから、古文書や先人祖先の話等を思い出してまとめてみたりした。

ちなみに、田中正造は小滝村に来たが、松木村には来ていない。それから、松木村に最後まで住んで残った人は、星野金次郎さんと書いてあるが、実は長男の金平さんであり、昭和三十年頃に足尾砂防ダムができた頃まで、古河の水番として働いていた。

私が非常に感じたことは、古河銅山との何回かの交渉内容や、県や国への嘆願等の内容が一部書物に記載されているが、その時々住民の心境、生活状況や日々亜硫酸ガスで苦しめられている日常生活のこと、交渉に遠く佐野、宇都宮、東京に行くときの代表人員の決め方、旅費、宿泊費、食事代交通費等が記載されていない、ということだ。日常生活の状況、実態はどうだったのかに興味を湧いてくる。

幼い頃、年寄りや祖父によく聞かされた言葉がある。「昔はなあー」が決まり文句で、「昔しやなあーこんなものは無かった」とか「昔しやなあーこんな

ぜいたくなかった」などと聞かされたものだ。今の世の中では「昔はなあー」は禁句になってしまった。

松木村に関するソフト面的なことは先に書いたように沢山あるが、コアの部分に触れた文献は見たことがない。本当の史実と、また昔からの言い伝えや故事伝説のようなお話も興味が出て面白いと思うようになった。例えば、

1. 銅福畑の話
 2. 殿様が刀を置いて行った話
 3. 殿様の行列が見えてからお湯を沸かしても間に合った話
 4. 足尾大火の放火説
 5. 祖父長太郎の名前の由来
 6. 日光下駄の発祥地の話
 7. 星野家の石の祠が消えた話
 8. 私の車に大きな石がぶつかった話
- 他にもいろいろ聞かされたが、一つ一つ面白い話と

して聞いていた。

私も仕事を退職して時間もできたので、一つ一つを調べた。そうしている内にもっともつと奥に入っ
て関心が深くなった。まだまだこれからも新しいこ
とを見つけて記したいと思っっている。

私が思いのままに書いたことやいろいろ調べて作
成したものは、おそらく私の時代で終り、後世には
続かないと思う。松木村は消えてしまったが、後世
の人達には記憶から消さずに残し伝えてもらいた
い。

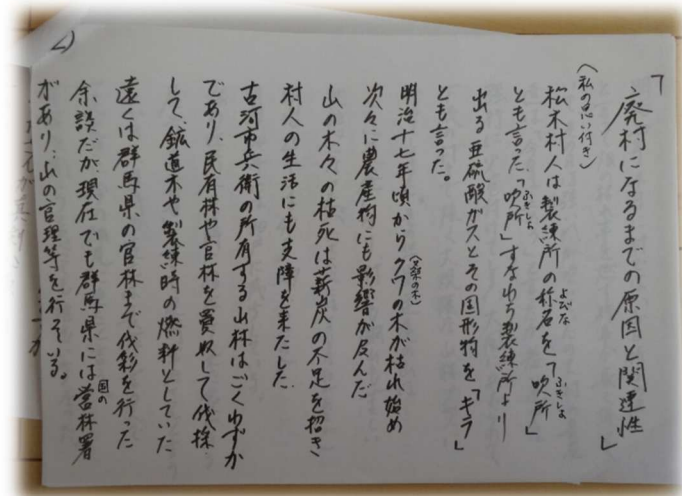
星野家も細尾に来て百年以上たつが、家族安泰、
私で七代目と続いている。これも先祖様のお陰と思
っている。稲荷様や仏様を尊んで、できる限り昔か
らの行事などは続けていきたいと思っっている（我が
家の稲荷様は豊川稲荷で、仏様は天台宗）。これから
も星野家の存続と繁栄を願っしていきたいと思う。

令和三年一月吉日 星野 茂



夕方の松木村跡・対面の山の影がかかる
（二〇一九年十二月十三日十六時頃撮影）

「廃村になるまでの原因と関連性」



「廢村になるまでの原因と関連性」

(私の行き)

松木村人は製錬所の林名を「吹所」とも言た。「吹所」すなわち製錬所より出る亜硫酸ガスとその固形物を「キラ」とも言った。

明治十七年頃からクラフの木が枯れ始め次々に農産物にも影響が及んだ。

山の木々の枯死は薪炭の不足を招き、村人の生活にも支障をきたした。

古河市兵衛の所屬する山林はごくわずかであり、民有林や官林を買収して伐採して、鋸道木や製錬時の燃料としていた。

遠くは群馬県の官林まで伐採を行った。余談だが現在でも群馬県には官林署があり、山の管理等を行っている。

松木村人は製錬所の呼び名を「吹所」とも言った。「吹所」すなわち製錬所より出る亜硫酸ガスとその固形物を「キラ」とも言った。

明治十七年頃から桑の木が枯れ始め、次々に農産物にも影響が及んだ。山の木々の枯死は薪炭の不足を招き、村人の生活にも支障をきたした。

古河市兵衛の所有する山林はごくわずかであり、民有林や官林を買収して伐採し、坑道木や製錬時の燃料としていた。遠くは群馬県の官林まで伐採をした。余談だが、現在でも群馬県には国の営林署があり山の管理を行っている。

村では「お日待ちの日」といって畑の枯れ草を燃やす行事が永く続いていた。明治二十年四月のその日は、強い風が吹いていたので村の長老たちは「今日は止める」と言ったにもかかわらず、若い連中は強行して火をつけてしまった。大風に煽られて下流の村まで焼く大規模な山林火災になってしまった。

その結果、足尾の山はさらに荒廃が進み、村人も銅

山も苦しい状態になった。

明治二十五年には四十戸、二六七人いた住民が、明治三十年には三十戸に減少してしまった。近所にその時に移転して来た家がある。屋号を「まんじや」といって星野常治さんの家である。家主が長作さんのとき、一足先に現在のところに移ったという。昔話を聞こうと思っても、現在は誰もいない（火事で全員が亡くなってしまった）。

山に木々が無くなって一番困るのが古河銅山である。採掘時の坑道の支柱や製錬の時の燃料が不足した。そこで、県境を越えて庚申山の官林を国から買い取って補うことにしたが、その木材を運搬するためには、どうしても松木村を通らなければならなかった。明治三十三年三月に銅山側は村に対して「林道」を作るからその分だけ土地を売ってくれ、あるいは貸してくれ、といった。それならば村全体を買ってくれと松木村が言ったことにより、対立が起った。

村人は、「土地収用法」について知識がなかったの
で、佐野の田中正造という人に、星野嘉市さんと金次郎さん二人が松木村の代表となって会いに行つた。しかし、田中正造には会えず、村に戻った。

その時に足尾鉍毒被害救済会の山田友次郎さんや玉生嘉寿平さん、広瀬勝三郎さんと出会い、何かと協力してもらうようになった。

明治三十四年三月十三日に宇都宮地方裁判所で行われた裁判では敗訴の判決が出た。その後、古河銅山との賠償金示談が行われ、弁護士の間直彦氏を仲裁人として全戸四万円で決着、松木村も廃村になることが決まった。残留していた二十五軒のうち一軒だけ松木に残った。結局のところ、長男の金平さんが昭和四十七年のN H Kで放送された「ドキュメンタリー松木村」で言ったように、短いもの（小さいもの）は結局長い物（大きいもの）に巻かれる、と言った結果になってしまった。

廃村の直接の原因は、吹所から出る亜硫酸ガス

(キラ) によるものではあるが、古河銅山による

「官林道」の問題が松木村を廃村に追い込んだ直接的な原因である。明治三十四年の裁判でも、国側の

「富国強兵」「殖産興業」の政策と、古河銅山に着いたということであろう。村人も当時は現在の「公

害」とは思わず、ただ自分達の生活のことしか考えられない時代だったのだろう。古河銅山が足尾に來た明治十年から明治三十五年のたった二十五年間で裕福だった村がこの世から葬られるとはだれも思わなかったと思う。今から一二〇年前のことではあるが、実際はどうだったのか。今の時代のようにビデオでもあれば実態がわかるが。

今後、松木村廃村のことや村人がいう「キラ」で苦しんだ生活等のことを誰に託したらいいのか。消

えてしまうことが心配である。

「私としては消さないで欲しい」

令和五年正月吉日

星野茂

¹ 明治九年十二月、古河市兵衛は志賀直道と足尾銅山を共同稼行するため、前経営者の長崎県士族副田欣一から坑業権を買収し、明治十年より経営をしている。(参考…財団法人経営史研究

所『創業一〇〇年史』古河鋳業株式会社、一九七六年)。

² 宇都宮工業高校は成績優秀者の進学先の一つだった。

³ 正しくは「足尾銅山の鋳煙毒の事件」星野嘉市。

家族の成長を見守って 話・星野登喜子さん

(二〇二二年十二月二十二日)

細尾の星野家

私の実家は江戸時代から続く日光市内の畳職の棟梁の家でした。夫とは高校の同級生です。細尾は日光と少し離れていますから、結婚が決まるまではあまり来たことはありませんでした。その頃は、おじいちゃん、おばあちゃん、茂さんと妹がいて一緒に生活を始めました。お風呂は外で薪を燃やして沸かし、洗濯も外でして、おばあちゃんが畑をやつてと、生活が変わったので最初は大変でした。昔のことと考えれば、今はあまり大変ではないですね。子どもは三人いますが、三人目ができた時、病院へ通うために自動車の免許を取りに行きました。

夏は、家が山に囲まれて涼しいので、帰宅するとホッとします。鹿が出て来たり、夏に窓を開けてお

くと猿が入ってきて階段に座っていたりします。お勝手に入ってラーメンとかカップラーメンを屋根へ持って行って食べて、ごみは置いていくのです。この前は、イノシシが車庫で死んでいたので日光市役所へ電話をしました。子熊に見えたので「親熊がいるかもしれないから家に入ってください」と言われました。ここは本当に自然の中ですね。

お盆には、家族で提灯を出したり、玄関には紋の入ったお迎えの幕を付けたりします。私達世代の後が続くかは分かりません。

冬は、炬燵にするのでテーブルが小さくなりますが、みんなが来ると大きいテーブルを出します。お正月も、お勝手の寒いところなますなどの料理を作るわけです。茂さんのおじさん、おばさんも来ると座るところが無くなり、ずっとお勝手にいることになりましたね。今年の正月も、一番上の孫がメキシコから彼氏を連れてやってきます。娘たちもみんなこちらへ移動してくるので二〇人位集まる予定です

す。楽しみですね。お酒を飲んでしまうとみんな泊まってしまう。夏は大丈夫ですが、冬は寒いですね。毎日、朝起きると暖房を全部つけます。でも、ビールは冷蔵庫に入れずに外で冷やせませすし、外の飲料水口につららができるので、自然の氷だ、といってお酒に入れて飲むこともできません。

日ごろの登喜子さん

茶道は若い頃から好きで、資格もとりました。月一回東京へ行ったり、日光の支部長をしたりしています。生活の一部になって、人脈もだんだん広がっています。年に一回、「日光茶会」というのがあり、一〇〇人ぐらいのお客様をもてなすことがあります。その経験から、家のお客様が十五人とか二十人とかになっても慌てません。大勢の人をもてなすということでは同じですね。修行のつもりで、育ててもらっているという気持ちでやっています。そうやって、自分がだんだん育ってきたのだと思います。

それから日光でもう三十八年間、公文の先生もやっています。後を引き継いでくれる人を募集中です。旧日光に公文がもう一軒しかないのです、中禅寺や足尾からも生徒が来ます。今は生徒が少なくなり、幼児から中学生までで週二日です。以前は二ヶ所で教室を開いていました。人数が少なくなっても、伸ばしてあげたいと思います。足尾から来る子は遠方なので、土曜日に特別教室を開くこともあります。

日光は冬のスポーツをしている子が多いです。スポーツをしながらの勉強は大変だと分かってくれる親たちが、公文に通わせてくれます。メキシコへ行った子も、中等部、高等部を小田原の公文学園で寮生活しながら学びました。今度、宇都宮東の中等部を受験する子がいるので、お母さんとコミュニケーションケーションをとりながら教えています。教えた子どもたちがそこから育って、中にはお医者さんや海外へ行った人、ウィンタースポーツの選手になった

人もいます。子どもの成長を見るのは楽しくて、それも生きがいです。こちらが大変でも、公文へ行くとまた子どもたちからパワーをもらって、という感じで続けてきました。

星野家の家族

子どもたちは、今でも何かあると、ここに集まってきます。コロナの前は、誰かが他所から来ると、親戚みんなが集まりました。こんな広い部屋が人でいっぱいになってしまいます。でも、みんなが集まりやすい家になってくれてうれしいです。

今は、孫たちの成長が楽しみです。以前はオーストラリアに長女家族が暮らしていて、孫の顔を見るために八回程行きました。向こうは紙類が高価なので荷物にして持っていきました。一度、飛行機に乗り遅れた時、大阪発の飛行機に変更して、大阪空港へ向かったということもありました。オーストラリアでは孫誕生も経験しました。向こうは赤ちゃん

を手足が動かないくらい、全部包んでしまうので。旦那さんもその病室から出勤するんです。いろいろな経験をしました。曾孫ももうじき産まれます。楽しみです。こうやって、子どもや孫たちからずっと元気もらっています。修行だと思えば苦しくない。経験の中からのいろいろな学んでいます。

茂さんのおばあちゃんは子どもが十一人いて、九十八歳まで生きました。母も生きていた頃、女五人五世代で写真を撮ったことがあります。(一番上が渡邊ハナさん(茂さんの母方の祖母)、恒子さん(茂さんの母)、登喜子さん、泰子さん(茂さんと登喜子さんの長女)、新菜さん(泰子さんの長女))星野家はずっとこうやって代々つながり、女性が支えてきたのかもしれないですね。みんなが集まって、一緒に楽しんで、家族なんですよ。

茂さんは、テレビで「ルーツ」の番組を見て松木村のことも調べるようになりました。松木村のことやルーツが分かって本当に良かったと思っています。

第二部 公開セミナーの記録

2022年度宇都宮大学多文化公共圏フォーラム第22回

公開セミナー「語り継ぐ足尾Ⅱ」

～足尾にあった松木村のことを忘れないでほしい～

日時：2023年1月12日（木）13：00～15：00

場所：宇都宮大学国際学部5号館B棟2階ラーニングcommons3（ハイブリッド）

明治時代、足尾銅山は近代技術の投入により、銅採掘や製錬の規模を急速に拡大させました。銅山の発展や繁栄は、一方で深刻な環境破壊や鉱害被害をもたらしました。足尾町北部にあった松木村は、煙害が集中し大火に遭い、1902年に廃村となりました。今では、松木村の生活の様子や離散した村民の想いを知ることが困難になっています。本セミナーでは、松木村村民の子孫である星野茂氏が代々伝わる家財や逸話を紹介し、書物だけでは分からない松木村を語り継ぎます。私たちは歴史から何を学べるのか、将来に何を伝えていくべきなのか、ともに考えましょう。



【松木村の語り】

星野 茂

日光市在住。曾祖父までの先祖が松木村に住んでいた。



【コメンテーター】

赤上 剛

田中正造・足尾銅山鉱毒事件研究者
元護国学院大学研究員



【解説】

匂坂 宏枝

宇都宮大学国際学研究所
博士後期課程在学、
多文化公共圏センター
研究員



【コメンテーター】

加藤 清次

元足尾高校教諭
現栃木県立高校非常勤講師



【司会】

高橋 若菜

宇都宮大学国際学部
教授、
多文化公共圏センター
一員



【コメンテーター】

清水 奈名子

宇都宮大学国際学部
教授、
福島原発震災に関する
研究フォーラム共同
世話役



星野茂氏宅に
設けられている
資料室

会場：宇都宮大学国際学部5号館B棟2階ラーニングcommons3
ZOOMミーティングルーム

参加費：無料

ZOOM参加申込：右のQRコードもしくは以下のアドレスよりお申込み下さい。
(申込時に氏名・メールアドレスをご入力いただくとZOOMのURLをご案内します。)

企画運営：環境と国際協力研究室

共 催：宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター

問い合わせ：〒321-8505 宇都宮市碑町330 宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター

メール takahashioffice.uu@gmail.com（高橋研究室）

電話番号 028-649-5196（平日9-16時）

1. 公開セミナーの記録

宇都宮大学では、星野様のお話を広く伝えることを目指して、公開セミナー『語りつぐ足尾Ⅱ』足尾にあった松木村のことを忘れないでほしい』を開催した。

以下は、その記録を抜粋したものである。主催者挨拶と開催趣旨説明（高橋若菜氏）、星野茂氏へのインタビュー、コメントーターの赤上剛氏、加藤清次氏、清水奈名子氏の発言内容を記した。

さらに、セミナー後にコメントーターの赤上氏、加藤氏から、追加情報提供があったため、これも補足として記した。

二〇二二年度

宇都宮大学多文化公共圏フォーラム第二十二回
公開セミナー「語り継ぐ足尾Ⅱ」足尾にあった
松木村のことを忘れないでほしい」

日時：二〇二三年一月十二日（木） 十三時～十五時

場所：宇都宮大学国際学部五号館 B 棟二階

ラーニングコメントズ3

プログラム

- 1 挨拶と趣旨説明 高橋 若菜
- 2 松木村の歴史と記憶 お話：星野 茂
解説：匂坂 宏枝
- 3 コメント 赤上剛
加藤清次
清水奈名子

〈挨拶と開催趣旨〉



高橋 若菜

(宇都宮大学国際学部教授、
多文化公共圏センター長)

みなさまこんにちは。宇都宮大学国際学部教授で、多文化公共圏センター長の高橋若菜と申します。本日は、多文化公共圏フォーラム「語り継ぐ足尾」にお越しいただきありがとうございます。

この「語り継ぐ足尾」は、昨年から始まり、本年はその第二弾となります。明治時代、足尾銅山は近代技術の投入により、銅採掘や製錬の規模を急速に拡大させました。銅山の発展や繁栄は、一方で深刻な環境破壊や鉱害被害をもたらしました。足尾町北部にあった松木村は、煙害が集中し大火に遭い、大変な辛酸を舐めた末に、一九〇二年に廃村となりました。今では、松木村の生活の様子や離散した村民の想いを知ることが困難になっています。本セミナーでは、松木村村民

の子孫の方が代々伝わる家財や逸話を紹介し、書物だけでは分からない松木村を語り継いでいただきます。私たちは歴史から何を学べるのか、将来に何を伝えていくべきなのか、ともに考える機会となればと願い、「語り継ぐ足尾 第二弾」を開催いたします。

本日お話を伺うのは星野茂様です。曾祖父までの先祖が、松木村に居住しておられ、現在は日光市内の私邸で、資料室を開設しておられます。本日は、星野様はご自宅におられ、宇都宮大学の博士後期過程在学中の匂坂宏枝さんが、ご自宅に伺っています。本日は、インターネット中継を通じて、星野さんに匂坂さんがインタビューをする形で、お話をいただく予定です。また星野様のお話を受けて、それぞれ違う視点から、三名の方々にコメントをいただきます。お一人目は渡良瀬川流域の研究の第一人者の赤上剛先生です。先生は、五十年続いた渡良瀬川研究会の顧問をしてこられ、『田中正造とその周辺』他を著されております。お二人目は、足尾高校の教諭を務められた加藤清次先生です。田中正造は敵、という生徒の声に驚き、足尾高校にて松木村の問題に向き合っただけでなく、その

して三人目は、より長期的な視点、グローバルな視点からお話しいただく、宇都宮大学国際学部教授の清水奈名子先生です。清水先生は、福島原発震災フォーラムの共同世話役でもおられ、足尾銅山による環境被害の今日版とも言えるような、福島原発震災に伴う多面的な被害の可視化を継続しておられます。本日までご登壇参加してくださる方々、またお集まりくださったみなさま、スタッフの方々に深くお礼申し上げます。

〈松木村の歴史と記憶から抜粋〉



お話し：星野 茂
質問：匂坂 宏枝

○質問・松木会について教えてください。

松木会は昭和四十七年に、うちの父（星野與次郎さん）と星野嘉市さんの長男、恒治さんと二人で作ります。

した。それから龍蔵寺の太田貞祐住職が協力してくださいました。私は、まだ二十代でしたから父の手伝いをしてました。よく集まりがあり、お彼岸には必ず龍蔵寺にお参りをしました。それから四十四、五年経ちますが、知っている方や会長さんに連絡を取っても亡くなっています。会長さんの家族に聞いても、書類がどこにあるかも分からなくなっています。それから、地元の人達もあんまり興味がないのです。結局、私が一人で動くほかないということです。

龍蔵寺のお彼岸の供養では、お寺に上がって茶話会をしました。私は自動車の免許を取った頃だったから、今市に住んでいる人やうちの分家の人とかを送迎しました。分家は三軒あるんですが、うちの親戚は多かったですね。最後は、松木村のことをよく知ってる星野清志さんが四年前に亡くなって、ほとんど分からなくなりました。だから、証文などもたまたまあれば見つかるということになっています。

松木会も、もっとうちの長男も一緒にやってほしいのですが、今の人は全然興味ないようです。娘（泰子さん）が、赤上先生とフォーラムで知り合って、その

おかげで私も先生と知り合えましたが。この町で、私が自治会長をして同じ年代集まっても、あまり松木のことを知ってる人がいません。よく松木は鉋毒で廃村になったと言われますが、川の水は北に流れないから鉋毒じゃなくて烟毒（いんどく）です。そういう誤解もあります。松木村の真実を知ってほしいです。そして私が書いた文や活字に起してくれたものにも興味を持ってほしいと思います。

○質問・田中正造さんとはどのような関係でしたか。

田中正造さんが松木村に来て面倒見てくれた、というところありませんでした。小滝には行きましたが、松木村の人たちは、田中正造さんに助けを求めて佐野に行きました。最初、松木村ってどこだ？と言われたらしいです。だから、松木村の一部の人達は、田中正造さんには「居留守を使われた」とか「反官僚的でも何もしてくれない」と言っただけです。その時に会った足尾鉋毒救済会の山田友治郎さん、廣瀬勝三郎さん、玉生嘉壽平さんが情報源になって田中正造さんにも松木村のことを知ってもらえたのだと思います。

○質問・示談はいつありましたか。

明治二十八年、銅山と松木村とで示談がありました。明治十八年に五ヶ村、明治二十八年に松木だけで話し合いをしましたが、それは不平等な示談だったため決裂しました。その時は、松木村に四十何軒ありました。その後、水問題で裁判なって川崎、北海道、日光に離村した家がありました。最後まで残ったのが、二十五軒なんです。同じ家系の川崎へいったおばさんが一回うちに来たこともありましたが、でももうお付き合いは無理ですね。どんどん忘れられていくという道になっていくのでしょうか。でも、できる限り、子孫には伝えていきたいと思っています。

松木会の設立

1973年(昭和48年)
会長 星野恒治(70才)
副会長 星野本次郎(50才)
他会員 名簿23名

※ 現在(令和に入ると)は松木会の
会長2代目(忠司)が亡くなってから
会長代行として副会長2代目(茂)
が1名で資料等を収継しております
現在は会員1名の在籍です。

〈赤上剛氏コメント〉 「渡良瀬川下流域から見た松木村」



赤上 剛
(田中正造・足尾銅山鉍毒
事件研究者、元渡良瀬川研
究会顧問)

まず、松木村を学ぶ意義を確認しておきたいと思
います。足尾銅山鉍毒事件に「松木村煙害廃村事件」も
含まれます。足尾銅山鉍毒事件こそ、近代日本の公害
悪行政の先例かつ根幹となりました。いまだ解決の目
途がたたないでいるチツソ水俣病事件や三・一一東電
福島第一原発事件などに、この公害悪行政が現在まで
踏襲されてきているのです。その本質は、国策企業擁
護、被害民の切り捨てです。加害責任を認めず誰も責
任を取らない、したがって損害賠償もしない、被害調
査・病状調査もしない、最後には政官業学の癒着一体
化でもみ消すということです。

人間は、空気と土地と水がなければ生きられませ
ん。この三つ全部を破壊したのが足尾銅山鉍毒事件で
す。鉍毒被害には〈煙害〉と〈毒水〉と二つがありま
す。(本当はさらに〈ヨロケ等労働災害〉もあるのです
が、ここでは略します)。

煙害は亜硫酸・亜ヒ酸という猛毒です。この煙害で
最上流の松木村に人が住めなくなってしまうました。
隣村の久藏村、仁田元村、高原木村等も煙害で廃村に
なっています。

松木村は、松木の村の人たちの所有でした。村民
は、一九〇一(明治三十四)年十二月に、古河市兵衛
に四万円(要請は七・五万円)で買い叩かれ売り渡し
て、離村せざるを得ませんでした。足尾銅山の周りの
はげ山はほぼ全部国有林です。延々と国の税金で植林
をやっていますが原因企業の古河は一切やっていませ
ん。何と国は一九六〇(昭和三十五)年六月に、林野
庁長官通達で「古河への補償請求権を放棄」していた
のです。

念のためですが、「足尾に緑を育てる会」の植林だけ

で緑が回復していると思っっている人が多いようです。私も参加してきたボランティアの植林は大事ですが、それはほんの一部です。山岳岩石崩壊防止、堰堤などの河川整備や植林に毎年、以前は約四十億と聞きましたが現在も相当な国の税金を使っているはずで、NPOのボランティアがやっているのは、税金で整備された安全地帯・表面的に植林できる所の担当です。

一方、毒水で廃村になったのが渡良瀬川最下流の谷中村なかつむらです。谷中村の廃村については、荒畑寒村が残留民家屋強制破壊直後の一九〇七（明治四十）年八月に『谷中村滅亡史』を書き、発禁になりましたが今は岩波文庫に入っていて広く読まれています。田中正造の直訴事件後、国によって「鉱毒問題が治水問題にすり替えられ」遊水地にするという名目で谷中村が強制廃村され、四五〇戸二七〇〇人の人々を買収されました。官憲の行政ルートで買収されたのですから追い出されたのも同然です。まさに「棄民化」です。買収に応じなかった十六戸は家まで強制破壊されてしまいました。したが仮小屋を建てて十年間抵抗し住み続けました。

正造もそこで苦楽を共にしたこともあって「谷中村事件」は一般的に知られています。しかし、「松木村廃村事件」は知る人が少なく、忘れ去られようとしています。今回、星野茂さんの提起で宇都宮大学の皆さんが取り上げて下さりうれしく思います。

さて、私の担当の「渡良瀬川下流域から見た松木村」について報告します。

松木村は、「この烟毒の中に住めば時々刻々生命が刻まれる状態でもはや居住どころではない」（「人命救助請願」）ので古河と示談して村を売りたいという話が具体化したのが、一九〇〇（明治三十三年）八月です。足尾銅山は栃木県側の木は全部伐採し尽くしたので、国から新たに群馬県側の根利・平川の官有林の払下げを受けました。林野整備局・栃木県吏、足尾町長らが松木村に来て、伐採した木材を銅山へ運ぶ林道を作るので松木村の敷地を貸せ、あるいは寄付しろと強要し問題になりました。これが発端です。

この頃、渡良瀬川下流の被害民たちは「川俣事件」で大変な目にあっていました。同年二月十三日に第四回大押出し（大挙上京請願運動）で、約二五〇〇人が

闘争本部である群馬県館林の雲龍寺を出発し徒歩で東京に向かいました。非暴力を徹底し素手です。群馬県の利根川の川俣という渡しの手前で、待ち構えていた警官隊や憲兵二百数十人からサーベルの鞘等さやで殴る蹴るの大暴行を受け蹴散らされました。リーダー六十八名が、兇徒聚集罪や治安警察法違反容疑で逮捕され前橋監獄へぶち込まれました。一八九〇（明治二十三）年に渡良瀬川大洪水で鉋毒の大被害が明らかになった十年後です。被害民は不毛の大地で生命・生活に苦慮する大変な事態に加え裁判闘争まで背負うことになりました。約三年間、裁判闘争は続きました。被害民たちは、松木村の事情を知ったとしても、とても手を貸す余裕はなかっただろうと思います。

田中正造は被告ではありませんが前橋地裁さらに東京控訴院、大審院、仙台控訴院と裁判闘争に付ききりでした。正造は自分の「官吏侮辱罪」裁判までありませんが、無料弁護士団や知識人、キリスト教など宗教人、新聞社などの支援を組織化する中心でした。衆議院議員として議会でも奮闘していました。

正造が松木村の代表者に会ったか、会わなかったか

という大事なことを述べます。私は従来「会ってなかった」と言っていました。今訂正します。『田中正造全集』等を再度調べると、日記や書簡に明確な日付はないのですが、正造が会った可能性が高いのです。

星野嘉市『足尾銅山の鉋烟毒の事件』によれば、松木村民代表の星野嘉市・星野金次郎が救済を願って田中正造を訪ねて村を出発したのが一九〇〇（明治三十三年）九月十四日です。この時は正造には佐野でも東京でも会えなかったのですが、佐野の「足尾銅山鉋毒被害救済会」の役員で正造の側近、玉生嘉寿平たまおかげと山田友次郎の助力を得ることができました。（*「足尾銅山鉋毒被害救済会」の最大の支出金は、松木村対策費二百円だった。松木村示談後四〇四円が村民から贈られている。『佐野市史』（通史編下巻））

「田中正造代議士に会った」という前掲星野嘉市報告は三回あります。

〈一回目〉一九〇〇（明治三十三年）年十月二十五日に、村民代表星野権平・星野嘉市・神山正三郎ら六名が山田友次郎に連れられて「上州管林（館林だろう）…

赤上)宿みなと屋に行き代議士田中氏他…に面会…とあります。そこから上京した三名が、島田三郎・大村和吉郎両代議士に会って救済を要請しています。この時正造は、川俣事件前橋地裁公判の真っ最中で全く余裕がなかったせいか『全集』に記載はありません。

〈二回目〉「一九〇一(明治三十四)年一月二十日

頃、星野権平・星野徳次郎が出京して「代議士大村和吉郎、田中正造…に面会(の)上、被害の惨状を陳情して…」とあります。この時については正造は「(明治三十四年一月)二十五日 今朝、銅山煙毒空気ト草種ノコトヲキク」と日記に記しているので、松木村という明示はないですが、松木村村民代表と会ったのは確実といえるでしょう。

〈三回目〉同年一月二十七日、神山正三郎・星野与吉が上京し「代議士田中正造、小崎某、大村和吉郎、貴族院議長近衛篤磨の四議員に面会…」とあります。これについての正造の日記はありません。

松木村民のこうした訴えが実り、一九〇一(明治三十四)年三月二十二日に大村和吉郎は正造他の賛同を得て衆議院第十五回議会に「利根川水源伐木ノ件ニ付

質問主意書」を出し、翌二十三日に衆議院議場に立つて「群馬県利根・平川官林を古河市兵衛に払い下げたのは事実か、その関連で松木村を通る林道を作るのは事実か」と追及しました。(『衆議院議事速記録第十八号』『衆議院議事速記録第十七号(第十五回議会)』東大出版会復刻、所収)

同日、続いて正造も登壇し「松木村人民を毒煙増加のため全村居住を棄てて退去せざるを得ざるに至らしめ…之に政府は救済の名を付するか」と口火を切り、大村和吉郎が述べた「古河への山林払下げと林道建設にかかる松木村村民の騒動」で「初めて利根川水源山林の大規模払下げが明らかになった」と鋭く政府に迫りました。

田中正造への三月二十二日農商務大臣答弁(要約)

「明治三十二年十二月末、群馬県根利官林を払い下げた。これに関連した木材運搬道路建設はない」

大村和吉郎に対する三月二十三日農商務大臣答弁(要約)

「明治三十三年一月四日、根利官林一四二五町歩を払い下げた。松木村を通る林道はこれと関係はない。古河は鉄索で材木を運搬するようだ」(*払下げ日時が

両答弁で違う)

こうしたやり取りを見ると、松木村民が騒ぎ出し国会問題にまでなったので、松木村を通る林道計画は中止し、「鉄索」(ケーブル)運搬に変更したと思われる。事実、根利官林木材は、小滝の銀山平に製材工場を作りそこへ鉄索で送られるようになりました。

このように、正造や大村和吉郎・島田三郎両代議士、近衛篤磨貴族院議長たちは国会で演説したり、「人命救助請願」等で骨を折りました。しかし、松木村に行って支援する余裕はありませんでした。松木村まで足を運んで親身に現地支援したのが山田友次郎たちです。彼らは裁判闘争を続行させようとしたが、松木村の人たちは、もはや人が住める状態ではないので裁判はやめ、とにかく少しでも高い金額で示談してほしいという希望でした。そこで示談となったのです。

正造は、佐野の救済会メンバーが古河と示談させたこと、四万円の手談金から謝礼金をもらったことを強烈に批判しました。山田友次郎はこれで「破門」されてしまいます。

しかし、もはや松木村に人は住めない、早く村を出

ないと死ぬしかないという状況では、示談して売しかなかつたらうと私は思います。ですから、田中正造が言ったからといって、それが常に正しいわけではないということをおきます。

下流域の人たちの動きですが、余裕はない中でしたが、被害民の強力な支援者で川俣事件投獄者の一人だった松本隆海(愛媛県松山出身)は、自ら編集した『足尾銅山鉍毒惨状画報』(明治三十四年三月発行)の中に、松木村のすさまじい煙害被害を挿絵を添えて掲載しました。

田中正造の右腕と言われた左部彦次郎さとりも、少し後ですが、松木村から提供された群馬県根利村ねりむら(*根利・平川は通称「根利村」と呼ばれ、明治三十一年から大正半ばまで約三千人が居住し働いていた)の官林払い下げという情報を得て、一九〇三(明治三十六)年七月に根利山を視察しました。その事実を基に、「根利官林の伐採反対・足尾銅山鉍業停止請願書」を彼の出身地、沼田の有力者五十二名の賛同を得て十二月に衆議院と貴族院に提出しています>(*この「請願書」につ

いては、『義人全集』第4編〈鉋毒事件下〉一九二七年、中外新論社、に何の説明もなく掲載されている。松木の事件に関連して、このようなプラスの影響力もあったということを上申し上げておきたいと思います。

〈加藤清次氏コメント〉
「足尾高校で着目した松木村」



加藤清次
(元足尾高校教諭
現栃木県立立高校非常勤講師)

足尾高校に六年間いて、主に日本史を担当していました。国民の民主的な歴史というのは、農民中心のアプローチでいきますが、それが近代になると少しずつ市民や労働者へスライドします。教育現場が足尾銅山のふもとの足尾だったので、教科書どおりにやります

と、そこで田中正造が出てきます。

私の足尾高校の先輩の生沼勤先生が、三年生の担当だった時、下原さん（仮名）という女生徒が「田中正造は嫌いですと言って、参っちゃったよ」と職員室に戻ってきました。その女生徒は感性の鋭い生徒でした。私も機械科一年生担当の際、現代社会にも環境教育があり、岩原君（仮名）という生徒が私のところに来て、「先生、田中正造は足尾の敵だよね」と言いました。この子たちは、企業城下町の足尾の中でそういう形でいくんだな、と私は思いました。

そうすると、とくに日本史学習をやっていく上で、江戸時代まで国民の主体であった百姓が、近代で断絶されます。田中正造が出てきた途端に、もう農民の立場には立たなくなってしまうのです。これを何とかしなければならぬ、というのが日本史をしている教師としての悩みでした。

しかしその頃私は、足尾の郷土の歴史を生沼先生や村上安正先生等に習っていました。その中で、今日も何度も出てきていますが、松木村農民集会から代表二人が、協力を仰ぐために田中正造のところへ行っている

ます。記録によれば、田中正造本人には会えないけれども、山田友治郎とか玉生嘉壽平とかに会って共闘が組めるような形になってきました。最後は銅山へ、松木を買ってくれ、という田中正造からすれば納得のいかないような結論になりました。そのことで田中正造は、足尾鋳毒被害救済会の山田らとは袂を分かつことになりましたが、銅山に村を買ってもらうしか生存の余地はないのだと考えると、これしかなかったんだろうと思います。

一九〇〇年九月に松木村農民集会という重要な会合で、田中正造に協力を仰ごうと決めるのです。しかし田中正造全集によれば、正造はその月か、その前の月に松木村のすぐ近くまで来ています。これは、彼が日記に綴っています。本山に行きましたし、小滝に行つて様子を見て、それから高原木に来て、その次に仁田元へ行っています。仁田元に行き、六十才ぐらいの老女と三十才ぐらいの娘がいて、こんな様子だったと書いてあります。

その時、案内人が、「これより半道行くと五、六軒はありますが、今は煙突高くなりてこのところをいら

れず」という。「人はいないようですよ」という案内だったので、その先にあるはずの松木に対しては、そういうことかと了解をしていたようです。そのときの案内人がすっかり案内をしていけば、正造はもう少し違った行動をする可能性はあつたはずです。また、田中正造は明治三十四年の衆議院第十五議會での質問で、根利地区の木材を招き入れるための林道を作るために銅山が松木村の土地を借用する件について、足尾銅山はこんなことをやってるんだぞ、と松木村の実情を国政の場で訴えました。明治三十四年、一九〇一年時点で質問していますから、確かに田中正造は松木村に対してもかなり気に掛けていたのです。

ただし、田中正造は、選挙区は全国区の人ではなく、小中村とか佐野の人たちの投票によって選出された衆議院議員です。だから、地域の人の權益を守るのがまず第一で、松木村の人を守っても票になりません。現代の人にはこの視点に欠けているのではないかと危惧しています。義人とか正義の人という、偉人としての要件から評価するというものではありません。先ほどの星野さんの話の中では松木村民は正造をよく

思っていなかったとありましたが、正造が冷たかった
といっても、現実の政治のシステム上のことも考慮し
なければなりません。そうした面もあるかもしれませ
んが、それでも、やはり田中正造はそれだけの人なん
だろうと思います。ここで私たちは、非常に困ってい
た松木村の人たちが、田中正造とそのグループの仲介
で、何とか最後に希望していた落とし所に行けたこと
を見るのが、大切なのだと思います。

星野さんのお話の中で、水樋取払訴訟についても少
しありましたが、それも人命救助嘆願書と一緒に二大
訴訟としてあったはずで。しかし、それは鉱業条例
と土地収用法のため一番で負けてしまい、語るほどの
内容はなかったといえます。でも一応、司法の場でも
このように闘ったということです。

結局私は、授業では、田中正造は足尾の敵でもなく
松木村の人たちを支援してきたんだ、といった爪痕を
残せればと思いました。爪痕も残さないで、生徒が大
人になってまた「田中正造は足尾の敵だ」と再生産す
るのでは、日本史の教員として能がありませんから、
憎まれても、とにかくアプローチしておかないと、と

思ってた授業したわけです。

しかしそれだけではまだ足りなくて、授業自体の構
造を、もっと違ったものにしていかなくてはならな
かったのではないかと最近思い返しています。でも本
日は、そこまで話す時間がありません。ただ私の日本
史の授業では、江戸時代までの主人公である国民の歴
史と、それ以降に市民や労働者が出てきた時代を、や
はり結び付けたいという企てはありました。足尾の人
たちは関係ないような顔していましたが、感度のいい
生徒は、感想文の中でその辺を受け止めてくれました。
私としては、大海に一滴のインクを落としたぐらいの
ことしかできなかったかなとは思いますが。
本日はありがとうございました。

〈清水奈名子氏コメント〉
「松木村から見る原発災害の構造」



清水奈名子
（宇都宮大学国際学部教授、
福島原発震災に関する研究
フォーラム共同世話役）

多様な当事者の経験から被害を可視化する

本日の星野様による語りから学びました最大の点は、当事者の経験から被害を可視化する、見える形にすることの重要性です。星野様からご提供いただいた資料には、「足尾鋇毒事件の、ただ俗にいうハードな面ではなく、ソフトな面を調べて書いている作家さんがいないことが、ちょっと残念な気がした」という記載があります。ソフトの面、内情面は、いわゆる「史実」としての公的な記録では残っていないことが指摘されています。人々が実際にはどのような経験をしながら、いかなる想いを抱いていたのかを知るためには、

関係者のお話を聞く、先祖が残した日記を読む、といった作業が必要になります。本日の星野様のお話は、ご自分が幼少の頃、囲炉裏端でお年寄りから昔話として当時の生活の有り様を聞いたことを、私たちに伝えてくださったということでした。私たちが記憶してきただことや調べたことは、一〇〇パーセントの事実ではないかもしれませんが、当事者がどんな経験をしたかを知るためには、多様な立場の方の語りから、被害を再構成していくことの必要性を感じました。

本日のお話の中にも、多様な登場人物が出てきました。例えば、土地を持つていた人と持っていなかった小作人の人では、きつと語りが異なると思いますし、男性たちのお話が多かったのですが、女性たちはどんな経験をしたのか、また、子どもたちはどんな境遇にあったかについても、思いを巡らせることができそうです。いろいろな立場の当事者から、何があったかについて聞き取り、再構成していくことの必要性を強く感じました。

原発事故と共通する一次被害と二次被害の連続性

原発事故との共通点として私が特に指摘したいことは、一次被害である煙害と二次被害であるその後の人権侵害の連続性という問題です。松木村が経験したのは、煙の害による空気の汚染と、水の汚染の両方があったというお話でした。鉱山から出たさまざまな物質によって環境が汚染され、人々の健康が損なわれます。これが一次被害であるとすると、一次被害を増幅してしまう二次被害が続いて起きて、さらに被害を深刻化させたということでした。

二次被害の例としては、松木村でも差別の問題が挙げられています。星野様のお話しにありましたが、松木村の住民は「松木っぼ」と呼ばれ、川で魚を捕って食べたら激しい腹痛を起こし二時間もかけて病院へ行ったのに、「松木っぼ」だからといって診てもらえなかったというお話がありました。また、出産した女性のお乳が出ないという話や、馬が草を食べたら白い泡を吹いて死んでしまったという被害は、当事者の方の話聞いて初めて私たちは知ることができます。

その一方で、古河の影響下にある病院や関係者、メ

ディアはこういう話は残さないわけです。そこに深刻な差別があったとしても、抑圧的、支配的な構造があると、その被害が記録されないことで、見えなくなってしまうという問題があります。

原発事故も全く同じような問題を抱えています。原発事故で避難指示が出た区域と、避難指示が出なかったものの汚染が深刻な区域との間に、政府や自治体からの支援格差が発生しました。その結果、本当は連帯をして支援を求める立場にある被害者が分断され、対立を招くことで、一次被害を増幅させていくという構造は、今回のお話からも見えてきました。その後の水俣や福島や、また核実験や核関連施設の被害者をはじめとする世界における核被害においても、同じような問題があります。

次世代への応答責任

また星野様は、次の世代にどう伝えていくかという問題意識のもとで、何とか知ってほしいということも話しておられました。次世代との関わりに関してご紹介したいのが、原発事故を中学生で経験した、わか

さんが、二〇二一年に出版された書籍『わかな十五歳・中学生の瞳に映った心』からの抜粋です。原発事故のあとになかなか大人たちが守ってくれないという状況に直面して、わかさんは「何を信じていいかわからなくなりました。親も、先生も本来ならば子どもを守るはずで、それが当然、大人たちの責任だと思ってきました。しかし、現実は違いました」「こんな『命を守れない社会』にしたのは誰なんだ、誰がわるいんだ」と私は高校時代、ずっと考え続けました」「命が優先だと主張する私に、『それは子どもの考え方。大人になれば分かる』と言う人もいました」以上がご紹介した書籍からの抜粋です。私たちは、若者世代からのこうした問い掛けに応答する責任があります。

残念ながら二十一世紀の日本で、福島原発事故を経験した若い方が、今、私たちに向けてこうした声を発しているのです。大人はどのように責任を取るべきかと聞く大人たちについてもわかさんは言及して、「『どうしていけないのか』を必死に考えて行動していくのが大人の『責任』の取り方なのではないか」、「私は謝ってほしいわけではありません。行動してほ

しいのです」と書いていました。このような若い世代からの問いに応答するためにも、実際、何があったのか、どんな構造の下で被害が生まれ、被害はどのような不可視化され、その結果としていかに被害が増幅されてきたかを、例えば、足尾銅山の事件であれ、水俣であれ、福島であれ、世界各地のさまざまな深刻な人権侵害を含む環境問題についても、共通して考える必要があります。次世代への応答責任からも、今日の話は非常に貴重だと考えています。

長期化する被害に向き合うための連携

最後に、足尾銅山の事件も、そして多くの環境問題、福島原発事故も、いずれも長期化する被害に向き合い続けることの難しさという点で共通しています。とくに原発事故に関して言えば、一次被害についての過小評価、否認が続いてきました。そのため、実は放射性物質による汚染は栃木県も含めて広範囲に広がっています。その被害が見えなくされ、結果として解決が困難になってきました。

事故後、十分な対応がされなければ、住民を追い詰

め不安をもたらします。こうした状況のもとであつても、自発的な市民活動によつて、被害の可視化が進んできたことも事実です。実際、栃木県でも福島県でも、市民たちが自分たちで放射能測定をしてマップを作つたり、地方自治体や関連省庁、議会関係者に請願に行つたり、または裁判をして被害が実際あるからそれを認めてほしいという活動を続けています。しかし、国策レベルで事故被害対策を実現することが困難な状態が続いてきました。

さらに、私が研究してきたなかで懸念していますのは、原発事故後の除染など、さまざまな対策は基礎自治体レベルに丸投げされてる部分がかなりあります。汚染の程度を問わず栃木県の自治体の多くも、実は対応が必要なのですが、現場への支援が乏しい中で対策の必要性とか被害の詳細が自治体職員のなかでも継承されていません。このままの状況が続けば、記録がなくなってしまうという問題が出てきています。

本日のお話から学んだ最後の点としては、地域的な連携と被害の記録化を継続することの必要性です。松木村では、共和主義的に小作人の人も含めさまざまな

人が、交代で事情を訴え支援を求めて働きかけました。多様な地域の方、栃木県も越えた地域とも連携をしながら、問題を可視化して対策を求める活動を地道に続けてきました。日本は市民社会がヨーロッパに比べて弱かったと言われますが、今日のお話では、本場に現場で一人一人が、多様な関係者に訴えていったことがよく分かりました。そういう力が、私たち市民の側にはあつたんだということも見えてきました。

福島県では甲状腺の検査は、事故当時一八歳以下の方で、希望する方が全員受けられます。しかし、栃木県も含めた周辺地域も、実は放射性ヨウ素による汚染があつたのですが、公費による甲状腺検査は一部の基礎自治体を除いてほとんど実現していません。それを補うために民間基金を作つて活動している方が、「放射性物質が県境を越えたのだから、私たちも県境を越えてつながる必要がある」と私に教えてくれました。被害が非常に深刻である状況で、私たちも地域を超えてつながりながら被害を可視化していく、記録を残していくことで、次世代への応答責任を果たせないでしょうか。そのように、今日は考えました。

〈加藤清次氏からの追加コメント〉

先ほど、十五歳のわかなさん、非常に率直で胸が打たれるいい子ですね。それと共に、これは資本主義、キヤピタリズムの本質を学べないという、教育の現場での不毛を感じます。足尾も水俣も原発事故も、キヤピタリズムという形では意外とシンプルな構造を持っています。そこをよく学べているかどうかというのが、これからの鍵です。だから、「大人は何を考えてるんでしようか」という彼女の戸惑いを感じて、私は胸の痛みを感じました。それは、そういう子たちに対して、手を差し伸べてこなかった大人の責任です。

あとは、社会科や地歴公民科の教員の使命として、当事者たち：つまり教員がどれだけ考えて授業をしているかが問題なのです。生徒たちは高校に入るまでに赤字国債の累積額が大変なことになっている、と教わってきます。そこで私は「日本は債務国ですか、債権国ですか？どちらかに手を挙げて下さい」と生徒に聞くと、ほとんどが債務国の方に手を挙げます。しかし途上国に貸したお金が何十億と戻ってきて、安倍首相はまたすぐ取って返したように貸している、なぜそれ

が可能なのか。それは、日本が有数の債権国だからです。要するに生徒たちは、累積赤字で一人八百八十万円あると、洗脳されているんです。そのため債務国に挙手したのです。

誰が、そのように植え付けたかといえば、社会科の先生です。だから教育現場での倫理性といいますが、先生が本当に勉強して授業やっているのかという問題もあります。先ほどの十五歳の少女の言葉は胸にしみて、こたえました。

追記…

安倍晋三元首相は、京都市内で講演し、一千兆円以上の国債発行残額を不安視する意見に対して「私は大丈夫だと言いたい。(中略) まだまだ日本国債は十分な信用があるから心配しないでもらいたい。これからもまだまだ財政政策をやっていく余裕はある」などと語った(二〇二二年六月七日(火)朝日新聞)。

私も同感であるし、授業でも紹介させてもらった。この安倍発言に財務官僚は渋い顔をしたことであろう。国民への洗脳が頓挫するかも…と心配して。

2. 補足

セミナー開催後、赤上剛氏と加藤清次氏から、今後の調査研究に有用な補足資料を提供いただいた。

〈赤上剛氏より〉

1. 田中正造は、一九〇〇（明治三十三）年八月（日付け不明）の日記に、仁田元や高原木を視察したようなことを書いています。奇妙なことに松木村の言及はありません。どう考えても、この頃の正造は「川俣事件」裁判で忙殺されており、遠い足尾まで行ける余地はなかったはずで、この時点では、まだ松木村代表が正造の支援を求めて動く前のことです。ですから、恐らく別の人が視察したことを正造が書き記したのではないでしょうか。

2. 煙害は、松木村だけのように思われますが、既述のように隣村も同様でしたし、とくに銅山製錬所周辺がひどかったようです。「古河城下町なので、煙害はタブーで口にできなかった」とか「最高に悩まされたのが煙害だ」「あまりの煙害に、大正九年、赤倉・間藤有志が『煙害問題安定期成会』をつくり古河と折衝した」「戦後の高度成長期がすぎまじかった（*自熔炉製錬導入後にもかかわらず）」「煙害は、昭和七年、渡良瀬川下流の群馬県東村沢入、草木（*現在の草木ダム周辺）まで大被害があった」などの記述があります。

（参照（紙数の関係で頁数は略））

朝日新聞前橋支局編『水・そして土 鉱毒と闘う』一九八三年、あさを社、『町民がつづる足尾の百年』一九九四年、光陽出版社、『同前』（第二部）二〇〇〇年林えいだい『望郷 鉱毒は消えず』一九七二年、亜紀書房、『群馬県史』（資料編二十一）

（*足尾銅山元の煙害については、『栃木県史』（通史編八）（資料編・近現代九）参照）

3. 星野金次郎・金平^{かねへい}さん一家が買収を拒否して一軒

だけ松木村に残ったといわれています。しかし、日露戦争（明治三十七・三十八年）まで十軒くらい家を残し住んでいたほか、他県から流れ着いた人たちが空き家に住んでいたようです。（鎌田忠良『棄民化の現在』一九七五年、大和書房）

4. 星野金平さんは、元松木村の奥にある私有地で、昭和元年、銅山をやるうとして人夫十人ほど雇って取り組んだが十年でとん挫し、「えらい損だった」そうです。（鎌田、前掲書）

5. 足尾銅山への官林払下げを調査したものに、次の論文があります。

笠井恭悦・篠崎学美・天野栄一「明治中期の足尾銅山と山林」（『栃木県史研究』十九号、一九八〇年）。

（*本論文には根利官林払下げ時期と面積について、大正三年までの記載がある。これによれば、先の政府答弁がいかに事実を歪曲しているかがわかる。）

6. 「故田中正造翁葬儀費報告書」の「香典・造花寄贈者芳名」によれば、足尾町星野金次郎十円とあります。一円以下が大多数ですので、星野金次郎がいかに田中正造を尊敬し恩義を感じていたかがわかります。恐らく、「古河に土地を売ってはならない。闘え！」という正造精神に賛同し自分も貫いたという思いが強かったからではないでしょうか。

〈加藤清次氏より〉

「松木村」拾遺メモ 加藤清次

1. 一八八五（明治十八）年の示談で、なぜ松木村は外されたのか。

星野さんの話では、龍蔵寺（赤倉）の住職は以前より松木村の裕福さを妬み、銅山、古河とベッタリで村と不仲だったことが外された原因だ、とのことでしたが、この件については、次のような指摘もあります。

これは奈良部真弓さん（足尾銅山の世界遺産登録を推進する会事務局）から頂いた私信（二〇一九年八月）で一部を紹介します。

・ ・ ・ ・ ・

星野治部左衛門を調べている方からの情報で松木村には天皇家の菊の御紋のお墓があると聞き確認したいところでした。足尾五姓は宮侍だと聞きました。日光山や安蘇郡あたりが近衛家の息が掛かっていた。頼朝以降代々鎌倉府が日光山別当にしていた。佐野の唐沢山城の藤原秀郷は京から父親が拝命されてきていた等々・ ・ ・ 当家の文献を検証している最中で無視していた巻物が大変なものだと昨年わかり、これから検証していくことになりました。

・ ・ ・ ・ ・

近衛家とは藤原摂関家の筆頭格の家系のこと、同会の Y 氏は、松木村が摂関家の所有であり、他の村と同等に示談交渉するには問題があったのではないかと推察しています。

近世の足尾は日光山門跡領でもあり（門跡とは、皇族や貴族の子が住職を務める寺院）、足尾十四ヶ村が確定するのは、一六六六（寛文六）年に実施された検地〔寛文検地〕からと遅めです。ちなみに『足尾郷土

誌』では「近世初期に検地を受けなかったことも、不可解である」（九十九頁）とあり、何らかの事情があったことが考えられます。

また寛政以前では日光山門跡の家来と言われる星野治部左衛門の「足尾御役所」が存在し、足尾十四ヶ村を統括していました。松木村については、村の生産性や豊かさだけではなく、その歴史についても考えなくてはならないようです。

2. 大名（新潟方面）が、星野家を宿泊地（本陣）にしていたことについて

二〇一八（平成三十）年より日光市歴史民族資料館では、足尾原村文書の調査が始まり、名主・齋藤家の文書から一六一五（元和偃武）年以前の足尾の様子がわかってきました。佐野唐沢山城から足尾一帯にかけてのエリアは、内陸交通の上で要衝であり、小田原の北条氏（後北条氏）の勢力が及ぶ北限でした。一五八九（天正十八）年に黒川城（のちの会津若松城）に入った伊達政宗は、同年、星野太郎左衛門（星野治部左衛門が襲名）に黒印状のある「伊達政宗過所」（過所は通行手形）を発行しています。つまり足尾から佐野に

向けての内陸地域に強い関心・野心を持っていたことが伺えます。また「吉江景資・吉江資賢連署状」では上杉謙信の家臣、吉江景資・吉江資賢が佐野の唐沢山城を二度、守り（一五六四年、一五六七年）、謙信が喜んだ、という記録があります。謙信がこのエリアを掌握し、更にその先を伺っていたことがわかります。そしてその記録が足尾原村の名主・齋藤家に残っていたという事実があります。

『足尾郷土誌』によれば「齋藤氏らは初め松木・高原木・原方面に入りこみ、後さらに異動したものと思われます。例えば齋藤大和守の建てた竜泉寺が、松木から原に移築されたことはこれを物語っている。」（九十九頁）とあるように、足尾十四ヶ村の中核となっていた原村のルートが松木村にあったことの意義は今後、解明を待ちたいです。

星野さんがお話した、大名（新潟方面）が星野家を宿泊地（本陣）にしていたことについては江戸時代ということもあり、日光社参のための宿泊であることがわかります。江戸期の大名たちは、参勤交代のほか家康廟である日光東照宮と家光廟である大猷院への参詣

（これを日光社参という）が時に命じられていました。有名なのは一七二八（享保十三）年に六十五年ぶりに徳川吉宗が発した日光社参です。これは軍役として命じられたため、各大名の負担は大変なものだったでしょう。星野さんの発表時に、大きな鉄瓶が複数並んでいました。賄っていた収容員数が想像され、感心させられました。

【参考文献】

- ・『足尾郷土誌』（足尾町郷土誌編集委員会 昭和五十三年）
- ・「令和二年度速報展 発見!!足尾の戦国時代」（日光市歴史民族資料館 令和二年十月三日）
- ・「令和三年度テーマ展 見えてきた 江戸時代の足尾」（日光市歴史民族資料館 令和三年七月二十六日）

あとがき

《星野茂氏との出会いと冊子作成の経緯》

二〇二二年七月、筆者は思いがけず、松木村民の子孫であるという星野茂氏にお会いする機会を得た。

「語り継ぐ足尾―生沼勤氏の語りとともに」を読んでくださった田中正造研究者の赤上剛氏から、宇都宮大学国際学部高橋若菜教授へ、星野茂氏宅訪問のお誘いがあった。そのお知らせを高橋教授から筆者がお受けした。訪問当日は、足尾鉍毒事件田中正造記念館事務局長の島野薫氏の運転で、館林市から星野茂氏宅へ向かった。聞けば島野氏は、ある講演会で星野茂氏にお会いし、お宅訪問のお許しをいただいていたそうである。その訪問がこの日であった。星野氏に巡り会わせていただけたお二人には、深く感謝を申し上げる。

星野茂氏からは、星野家に代々伝わる書類やご自身がまとめられた資料を見せていただいたり、松木村に関わる沢山の話をお聞きしたりした。この訪問は、既に存在しないはずの松木村が、まるで眼前に現れてくるような衝撃の連続だった。

その後、星野茂氏からお聞きしたお話や資料は、文字にして残すべきであると考えようになった。幸い星野茂氏にもご理解いただき、本冊子の作成を目指すことになった。

《星野茂氏のお話》

その後、数回にわたり星野茂氏宅へお伺いした。松木村の歴史、星野家の先祖の話、子どもたちや孫たちの話など、星野家に纏わるお話を沢山お聞きした。中でも星野氏がいつも語られるのは、

「田中正造に会いに行くときは、いつも違う人が行くんだ。みんなで話合っつて、代表を決めるんだ。松木村は本当に共和的な村なんだね。」

ということだ。松木村には家畜の馬も農地も共同で利用できる仕組みがあったそうである。村民の共助によって、村全体が文化的にも経済的にも豊かな生活していたことが思い浮ぶ。

一方で、銅山に対してはどうか。星野氏は、足尾銅

山のことを「古河銅山」と呼ぶ。これは、家族皆が使っていた呼称だそうだ。松木村に煙害をもたらした廃村に追いやったものは、銅山の持ち主である古河なのだ、という意思が伝わってくる。煙害によって松木村を離れなければならなかった村民たちの苦しさ、悔しさは、星野氏の言葉の端々から伝わる。

星野家では養蚕による蓄えがあったようで、移住後も経済的には困窮することはなかった。しかし、それがかえって移住先での差別につながってしまったと第一歩でも記している。被害から遠ざかれば、それで済むというものではない。

離村から百年以上が経過し、現在は穏やかな生活が続いている。星野氏は、子どもたちや孫たちの活躍を話すとき、とてもうれしそうな顔をされる。海外に生活していた孫の影響で、茂・登喜子夫妻はお互いを「グランマ、グランパ」と呼び合う。

「今こうして生活できるのは、ご先祖様たちのおかげなんだな。」

も星野氏がよく言われる言葉である。「家族の繋がり」が星野家を支えてきたのだろう。

《星野登喜子氏のお話》

星野家を訪問する度に、登喜子氏は美しいカップで紅茶やコーヒーを出してくださいさる。その美味しさに感心しつつ、まるで親戚の家を訪問しているような穏やかな気持ちになる。

その登喜子氏が、インタビューの際によく言われた言葉が、

「修行だと思っっているんですよ」

である。人生と茶道は共通するものがあるのだろう。いつものように星野家を訪問した際、登喜子氏の知り合いだというAさんが、一緒に松木村の話を書き聞いた、とのことで同席されたことがあった。Aさんは中学生の子どものいる母親で、日光市内で仕事をしている。おしゃべりの中で、日光市の学校教育のことや住民の気風について話しをしてくれた。住んでいるから

こそ分かること、けれど普段口にはしないであろうことを、筆者は胸が痛くなる想いで聞いた。

松木村のことでも「語れない、残せない」ことは膨大であろう。松木村が煙害に襲われる生活の中で、女性たちも日々家族のために奮闘し、苦しんでいたはずである。さぞかしつらい「修行」だったことだろう。残念ながら、それを語れる方は、もういないそうである。

〈公開セミナーの開催〉

二〇二三年一月十二日、星野氏が語る松木村の歴史と記録を報告する目的で、「宇都宮大学多文化公共圏フォーラム第二十二回公開セミナー」語り継ぐ足尾Ⅱ「足尾にあった松木村のことを忘れないでほしい」を宇都宮大学で開催した。ウェブ会議システムを利用して、全国から視聴いただくことができた。星野氏はご体調の加減もあり、自宅から参加した。

赤上氏と加藤氏からは、「語り継ぐ足尾―生沼勤氏の語りとともに」を読んでもくださったこともあり、高橋教授にご連絡をいただいていた。これも、足尾がつな

いだご縁ともいうべきだろう。このセミナーは、星野氏のご体調の関係で開催日程をなかなか決めることができなかつた。開催日が決まった際には、三名のコメントーターともに出席の快諾をいただけた。ご協力に感謝を申し上げる。

セミナーではまず、松木村はどのような村だったのか、煙害の状況は如何様だったのか、その後村民はどのように生活をしたのか等を示した。これは、煙害が発生して松木村が廃村になったということが、渡良瀬川下流域の鉾毒被害に比べて案外知られていないからである。星野茂氏には、より具体的に松木村に関する記録と記憶について話しをいただいた。

次に、松木村の煙害と廃村を多面的に考える一助として、三名のコメントーターからコメントをいただいた。赤上剛氏からは松木村の廃村を考える意義と田中正造の動向を、加藤清次氏からは教育現場において松木村の廃村の事実を知る意義を、そして、清水奈名子氏からは松木村の廃村と福島第一原発事故との共通点と教訓を、それぞれ報告いただいた。コメント内容については、第二部を読みたい。

星野氏宅では、茂氏、登喜子氏が並んで炬燵に入り、三名のコメンテーターの話を聞き入っていた。

コメンテーターの知識の豊富さに感心し、また松木村の廃村の歴史の意義について、あらためて認識いたされた。

セミナーでは、ウェブ会議システムに不慣れなこともあり反省点は多かったが、視聴者からは多くの好評をいただいた。星野氏の言葉から、松木村が廃村になった当時の村人の想いが伝わったことであろう。

公害に限らず、「被害」は多面的に捉えることができなければ、その全容は見えてこない。松木村の廃村も、「被害」の一部として蘇らせることによって、将来に活かすことができる。そのためにも、記録を残すことは重要である。この冊子が、煙害の記録の一助となればうれしい限りである。

星野茂氏にはお身体を大切にしてください、ますます精力的に松木村の歴史の発見に取り組んでいただきたい。再び、松木村について発信ができる時がくることを期待している。



二〇二二年七月、赤上氏と島野氏と星野家を訪問。右から赤上氏、島野氏、登喜子氏、茂氏。

あとがきにそえて 高橋若菜

松木村跡へ初めて足を運んだのは、二〇一三年、大学の合同授業の一環で、足尾渡良瀬のフィールドツアーを実施した時のことである。山の斜面一面を、黒光りした

カラミ（製錬工程での廃棄物）が覆り、山あいの平地には、夏草がぼうぼうに生い茂っていた。人が住んでいた痕跡はほぼなく、墓碑が数体並んでいるのみである。しかし以前は、養蚕が盛んで、農業や狩猟もあり、豊かな暮らしが営まれていた。室町時代から存続していたというから、江戸期からの足尾銅山より遙かに長い歴史があることになる。といった生沼先生（元足尾高校社会科教師、『語り継ぐ足尾』第一弾の語り手）の解説に、軽く眩暈を覚えるような殺風景は、今日も変わらない。

豊かな村を、ここまで徹底的に破壊しつくしたのが、星野さんが“キラ”と呼ぶ亜硫酸ガスだった。古河の製錬所から流れるキラは生活の糧を奪い、人馬の健康や命も奪った。甚大な被害がありながら、差別を受け医療も受けられなかった。日光下駄などで命を繋ぎながら、

人命嘆願を方々に訴えた、という壮絶な歴史は、ほとんど公的な記録には残っていない。足尾銅山由来の環境被害は「鉍毒事件」として知られる。しかし鉍毒水により廃村に追い込まれた谷中村と、キラにより廃村に追い込まれた松木村は、表裏一体の被害である。

このことからすれば、松木村救済に向けて陣頭に立っていた地元名士、星野家の末裔、星野茂さんによる語りや展示が、いかほど貴重で重みがあることか、筆舌に尽くし難い。星野さんを本学へ繋いでくださった、田中正造研究第一人者の赤上剛先生に感謝申し上げます。赤上先生の紹介で星野様と知り合い、その記録の数々に魅せられた匂坂宏枝さんは、幾度か星野邸に通わせていただき、わずか数ヶ月のスピードでの報告書作成・公開セミナー開催に至った。惜しみないご協力をいただいた星野茂さん・お連れ合いの登喜子さんに心より感謝申し上げます。本報告書は、星野さんの膨大な記録の一部に過ぎないが、後世に松木村のことを残し伝える一助となり、未来への道標になればと強く願っている。

編集後記

星野氏と出会って一年と経たずにセミナーの開催、冊子の作成となった。星野氏のご体調を第一に静岡県―栃木県日光市という遠距離間で編集をしてきた。あまりに慌ただしく急な作業となつてしまい、星野氏とコメントーターの皆様にはお詫びを申し上げる。星野氏からは毎回丁寧にご対応いただき、またたくさんのエピソードをお話しいただいた。その全部を掲載しなかったが適わなかった。編者の力不足を痛感している。お礼とともにお詫び申し上げます。

さて、星野氏と出会った二〇二二年には、渡良瀬川研究会の閉会、田中正造大学の閉校という非常に残念な動きがあった。この時期にこの冊子を作成できたことを感慨深く思う。田中正造大学の最終講義の際、講師の長崎大学友澤悠季准教授が、この問題は「足尾銅山鉍煙毒事件」なのだと述べた。この公害は、渡良瀬川下流域の鉍毒だけでなく、足尾の村々の煙害を含めて考えなければ全体像が見えてこないことだ。松木村の煙害はなぜ見えてこないのか。足尾銅山や足尾銅山鉍毒事件は、

まだまだたくさんの方の教訓を私たちに与えてくれそうだと。最後に、宇都宮大学国際学部高橋若菜教授には、多くの励ましと本冊子作成のご助言をいただいた。心より御礼申し上げます。

【本冊子は、二〇二二年度国際学部ミッション達成支援経費と令和四年度大学院生研究奨励金の支援を受けて作成しました。】

語り継ぐ足尾2 ―星野茂氏の松木村―

二〇二三年三月一日 第一版第一刷発行

話者・著者 星野茂・星野登喜子・赤上剛・

加藤清次・清水奈名子・高橋若菜

著者・編集 匂坂宏枝（宇都宮大学国際学研究所

博士後期課程）

監修 高橋若菜（宇都宮大学国際学部教授）

発行所…宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター

〒三二一・八五〇五 栃木県宇都宮市峰町三五〇

写真 上 松木村下の村あたり。鰻が捨てられている山。

中 星野茂氏が作成した多くの資料。

下 龍蔵寺に移動した松木村の墓石。

表紙デザイン…大石美由紀

